

---

# 名探偵コナン・忘却の狂戦者(バーサーカー)

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名探偵コナン・忘却の狂戦者<sup>ハイサーカー</sup>

### 【Nコード】

N3917H

### 【作者名】

ユーリ

### 【あらすじ】

全7章で完結した、『FBIから来た女』シリーズのスペシャル版第14弾。コナンと哀を地獄へと突き落とす、魔女の策略が始まった!!

## プロローグ：哀が見た悪夢（前書き）

この話は、『FBIから来た女』シリーズのスペシャル版第14弾です。

『ハヤテのごとく!』からのキャラクターも多数出演しています。コラボが苦手な方はご注意ください。

## プロローグ：哀が見た悪夢

哀

「ペンデュラムアッド、ついに壊滅できたわね。」

コナン

「ああ……これで心おきなくオマエとつき合えるな。」

哀

「ええ……でも良いのかしら……私があなたとつき合っても……」

コナン

「オレはオマエを好きになったんだ。誰にも邪魔はさせないさ。」

哀

「嬉しい……」

コナンと哀は、ラブラブムード満点だった。

そして、その夜……

哀

「スー、スー……」

哀が寝ていると、突然物音がした。

ガタン！

哀

「何かしら、今の音……」

哀はベッドから降りると、音のした方へと歩いて行く。

哀

「誰がいるの？」

哀は玄関のドアを開けた。

外には誰もいない。

哀

「フツ、気のせいね。」

パタン！

ドアを閉め振り返った哀の後ろには、ロープを羽織った見知らぬ人間が立っていた。

哀

「な……うっ……！」

ガバツ！

哀は口を手で塞がれる。

「ようやく見つけたわよ、宮野志保……」

哀

「(わ、私の本名を知ってる!?!この子、一体・・・)」

「アタシの名は久遠木ミカゲ・・・さしずめ、重罪人の断罪者ってトコかしら。」

哀

「(断罪者?この子が・・・!?!)」

「哀?何今の音?」

コナンの声が聞こえた。

哀

「(新一君!?)」

「あら、工藤新一も起きちゃったか。ちょうど良かったわ、手間が省けた・・・」

コナン

「哀、そこで何してるの?」

コナンはリビングへと近づいて来る。

コッ、コッ・・・

哀

「(新一君、来ちゃダメ!!)」

哀は必死に身をよじるが、ミカゲの握力は強く振りほどけない。

ジタバタ・・・

「よく見ておきなさい、宮野志保・・・重罪を犯した者に関わった者達が、どのような裁きを受けるのかをね・・・」

ミカゲはショットガンを構えた。

哀

「んっ、んっんっ!!」

哀は必死にもがく。

コナン

「哀、開けるよ?」

コナンはリビングのドアを開けようとする。

ミカゲは容赦なく、ショットガンをドアへと向けた。

哀

「んっ!!」

哀は声にならない悲鳴をあげる。

哀

「新っっ!!!!」

気がつくくと、哀はベッドの上でコナンの本名を叫んでいた。

哀

「ハア、ハア……」

哀は隣で寝ているコナンの方を見る。

コナン

「スー、スー……」

コナンは気持ち良さそうに寝息を立てていた。

哀

「夢……か……クソッ、何て夢なの……」

哀はオデコを押さえると、再びベッドに倒れ込む。

そのままコナンに抱きつくくと、哀は寝息を立て始めた。

しかし、哀はこの時気づいていなかった。

今回見た夢こそが、後に哀とコナンを地獄へと突き落とす絶望の物語への序曲であつた事を……

## 序章：名探偵コナン・メインテーマ（忘却バージョン）

名探偵コナン『忘却の狂戦者』バーサーカー

私の名前は宮野志保。

黒の組織の科学者よ。

私は組織で薬の研究をしてたんだけど、たった1人の肉親であるお姉ちゃんをジーンに殺され、薬の研究を中断した。

その結果、私はガス室に閉じ込められてしまう。

どうせ殺されるならと、私は隠し持っていた薬を自ら飲み・・・

何と体が縮んでしまったの。

宮野志保が生きてるとヤツらにバレたらまた命を狙われ、周りの人間にも危害が及ぶ。

阿笠博士の助言で正体を隠す事にした私は、灰原哀と名乗り・・・  
転校先の帝丹小学校で、私と同じく幼児化した工藤新一君と出会ったわ。

歴史の裏で暗躍する悪の組織、その名はペンデュラムアッド。

黒・緑・赤・青・黄の5つの組織が1つになった組織よ。

ペンデュラムアッドには最強と言われる10人の悪魔がいるの。

名はそれぞれ、ダゴン・スレイプニル・ゴーゴン・ワイバーン・テイターン・スフィンクス・ドレイク・トード・サイクロプス・イフリートと呼ばれているわ。

彼らの目的は世界を支配する事だったけれど、私が率いたアルというチームとの戦いでスフィンクス・イフリート・サイクロプス・トード・ドレイク以外の悪魔は死亡。

ドレイク以外の悪魔は人間に戻り、私達と友情を結んだわ。

ペンデュラムアッドとの長きにわたる戦いでは、FBIのみんな以外にもディティタイプマスターという48人の猛者達も協力してくれたの。

彼らの協力がなければ、きっとペンデュラムアッドは壊滅させられなかったでしょうね。

そんな中、FBIとは別にペンデュラムアッドを潰そうと活動していた白の組織内部に不穏な空気が立ち込め始めている。

ようやく平和になったのに、また秩序を乱そうとする輩が現れたらしいの。

この世界を汚そうとする輩は、この私が許さない！

かつてない危機の予感だけど、絶対この窮地を凌いでみせる！！

工藤新一の恋人の名にかけて!!!

小さくなくても、頭脳は同じ!

迷宮なしの女名探偵!!

真実は、いつも1つ!!!

## 第1章 - 1 : 休息の潮干狩り

コナンと哀は、アルのメンバーとして共に戦った仲間達と一緒に海水浴場へ潮干狩りに来ていた。

哀

「なかなか大量にあるわね。」

コナン

「ああ、ここは工藤家とその関係者しか知らない穴場だからな。」

ユリ

「そんな所に私達が来ても良いワケ？」

播磨紅子

「別に良いわよ。ねえ有希子さん、優作さん？」

有希子

「ええ、賑やかなのは良い事よ。」

優作

「こんな良い場所が、私達だけの間でくすぶっているのは勿体ないからな。」

ハヤテ

「恩に切りますよ、新一君。」

咲夜

「潮干狩りなんて何年振りやろ！なあ、ナギ？」

ナギ

「ああ。ところで、結はさっきから何をしてるんだ？」

結

「ああ、ナギ姉。さっき砂浜を散歩したら、こんな物を拾ったんですよ。」

結はコナン達に一枚の紙飛行機を見せた。

コナンは紙飛行機を広げる。

N L 7

コナン

「何だ？このアルファベットと数字が書かれてる妙な紙は？」

哀

「コンマも入ってるわね。」

千桜

「どこから飛んで来たんだろうか？」

愛歌

「この海水浴場の近くに人が泊まれる場所とかあるんですか？」

有希子

「確かここから少し歩いた所にコテージが何軒か建ってるけど・・・」

今は誰も使っていないハズよ？夏休みに私達がよく貸切にしてたし。」

美希

「フーン……」

伊澄

「それより、みんなでスイカ割りでもしません？」

理沙

「良いですね、伊澄君！」

ソニア

「是非やりましょう！」

紅子

「じゃあアタシと有希子さんとスイカ買って来るわね。」

紅子と有希子は、スイカを買いに向かった。

1時間後、コナン達はスイカ割りを始めていた。

ヒナギク

「泉、そっちよそっち！」

トットットット……

泉

「えいやー！」

パソコン！

泉の一振りにはスイカに見事ヒットし、スイカは真っ2つに割れた。

美希

「お見事、泉！」

泉

「こづいづのは得意なんだ〜」

お次は結の番だが・・・

ナギ

「何で結がやると、周りのみんなが巻き込まれるワケ？」

結

「私こづいづの苦手なんですよ〜。」

愛歌

「とか言ってる、ワザとやってるんじゃないの？」

結

「テヘッ、バレたか。」

千桜

「やっぱり・・・」

愛歌達は呆れた。

ソニア

「皆さん、スイカ早く食べましょうよ。食べ終わったスイカの種で的当てをするってのはどうですか？」

咲夜

「お、ええな！」

マリア（ハヤテキャラ）

「やりましょう！」

コナン達は割ったスイカを食べると、余った種で的当てを楽しんだ。そんな彼らを、密かに監視している者達がいた。

「ヤツらか、ペンデュラムアッドを壊滅させた勢力というのは。」

「ええ、アルっていうらしいわね。」

「ちょうど良いじゃない。平和ボケして浮かれている彼らに、底知れぬ絶望感を植えつけてあげましょうよ。」

「そうね。特に宮野志保・・・シエリーをね。」

謎の者達は高笑いすると、静かにその場を後にした。

## 第1章・2：協会の捜査会議

それから3日後、ハヤテと咲夜は朝から捜査会議に呼ばれていた。

咲夜

「空を飛んで移動するんは快適でええなあ。」

ハヤテ

「おかげで予定よりだいぶ早く着きましたからね。」

ハヤテと咲夜が本部に入ると、伊澄と理沙に出くわした。

伊澄

「おはようございますハヤテ様、咲夜。」

ハヤテ

「2人共早いですね。」

理沙

「伊澄君は道に迷うからね。2時間くらい早く出ないと時間通りに着かないんだよ。」

ハヤテ達が談笑していると、風月と暁がやって来た。

暁

「おはようございます、みんな。」

風月

「部屋は確かあっちよね?」

歩美

「うん。」

朝美

「じゃあ、行きましょ。」

ハヤテ達は会議を行う部屋に向かう。

ガチャ!

ハヤテ達は部屋に入ると、各々の席に着席した。

程なく、ジエイムズや他のメンバーが入って来る。

1時間後、捜査会議が始まった。

ジエイムズ

「デイトイティクティブマスターの諸君、今日は忙しい中よく来てくれた。今日諸君らに集まってもらったのは、巷を騒がせている連続殺人事件の捜査のためだ。」

正宗

「もったいぶらないで言ったらどうです?世界にいるデイトイティクティブマスターが次々襲撃されていると。」

凧

「ちょっと、正宗!」

風蘭

「まあ実際事実だしね。」

時音

「ボス、被害者の身元は？」

ジエイムズ

「それなら円谷朝美君に任せてある。朝美君！」

朝美

「はい。最初に殺害されたのは、イギリスを担当していたカイルとネイルのエヴァンズ兄妹です。左肩から右下にかけて鋭い刃物で斬られ、失血死したと思われまます。」

瑛祐

「犯人は左利きという事か。」

朝美

「第3の被害者は、アメリカを担当していたエミリー・ワトソンです。彼女もまた同様の方法で殺されていました。」

琴美

「来月には結婚式が控えていたってのに・・・非情な事するわよね、犯人も。」

朝美

「次の被害者は、ロシアを担当していたユツキとボリスのイヴァーノフ姉弟です。」

羽鳥

「死因も同様？」

朝美

「はい。」

ミサオ

「これで通算5人か。」

ミサオは手帳にメモをした。

朝美

「5人の被害者の共通点は今の所、世界担当のディティディクティブマスターである事だけです。」

三稜

「ボス、今の共通点で次の被害者を予測するのは難しいのでは？」

ジエイムズ

「確かにこれだけでは何ともならん。だが、京都府警本部長と刑事部長が興味深い事を調べてくれた。琴葉君、愛子君！」

琴葉

「はい！彼ら5人はかつて、同じ部署で刑事をしていた過去がありました。つまり、彼らと同じ部署に務めていた者がわかれば、次に狙われる者がある程度予測できる事になります。」

愛子

「みんな！犯人はこの先も犯行を重ねる可能性があるわ！探偵協会の威信にかけてもそれは阻止しなければならぬ！48人＋がー

丸となって、この連続殺人事件の犯人逮捕に全力を注ぐように!!」

「はい!!」

ハヤテ達は、力強く返事をした。

しかしこの日を境に、ディティティクティブマスター達が1人、また1人と失踪してしまう事になるのである・・・

### 第1章・3：コナン達への協力要請

翌日、帝丹小学校

コナン達が給食を取っていると、突然校内放送がかかった。

『少年探偵団の江戸川コナン君と灰原哀さん。お知り合いの方が職員室でお待ちです。繰り返します。少年探偵団の江戸川コナン君と灰原哀さん。お知り合いの方が職員室でお待ちです・・・』

コナン

「知り合い？誰だろ。」

哀

「行ってみましょ。」

ユリや元太達も、コナンと哀について行った。

コナン達は職員室に着き、中へと入る。

ガラッ！

職員室には、ヒナギクとデュリオアが立っていた。

コナン

「ヒナギクさん、デュリオア！」

ヒナギク

「久しぶりね、みんな。」

デュリオア

「ペンデュラムアッドを壊滅させて以来だな。」

ユリ

「それで何しに来たの？わざわざ挨拶しに米花町まで来たワケじゃないんでしょ？」

ヒナギク

「さすがは少年探偵団。察しが良いわね。」

デュリオア

「ちょっとここでは話せない内容なんでな。できれば白皇まで来て欲しいんだが……」

哀

「かまわないわよ。ねえ、コナン君？」

コナン

「ああ、オレ達もちょうどヒナギクさん達に会いたかったし。」

ヒナギク

「そんなワケで、しばらくこの子達をお借りしますね。」

植松竜司郎

「かまわんよ。」

デュリオア

「ありがとうございます、植松校長。じゃあ、行くぞ。」

コナン達はヒナギクとデュリオアに連れられ、白皇学院へと向かった。

白皇学院・時計塔

コナン達はヒナギクとデュリオアに連れられ、白皇学院の時計塔にやって来た。

エレベーターに乗り、生徒会室へと向かう。

ガーッ！

生徒会室に入ると、見知った人達が集まっていた。

コナン

「蘭、園子！」

蘭

「新一！」

哀

「美保ちゃんに松葉ちゃんも！」

松葉

「よー！」

ユリ

「ジンまで来てたのね。」

ヒナギク

「じゃあそろそろ本題に入ろうと思うわ。デュン君！」

デュリオア

「ああ。みんな、これを見てくれ。」

デュリオアは机にリストのような物を置いた。

パサツ！

コナン達はリストに目をやる。

コナン

「こ、これって！」

哀

「ディティティクティブマスター達の名前ばかりじゃない!?!」

そう、リストには48人のディティティクティブマスターと関係者の名前が出身学校等と共に記載されていた。

ここに一部を抜粋する。

行方不明者のリスト

帝丹小学校の関係者

吉田歩美

如月風月

常盤暁

帝丹高校関係者

本堂瑛祐

日向琴美

紅百合女学院関係者

円谷朝美

白皇学院関係者

綾崎ハヤテ

愛沢咲夜

春風千桜

霞愛歌

鷺之宮伊澄

朝風理沙

橘ワタル

ソニア・シャフルナーズ

花菱美希

山王学園関係者

瀬藤銀一

瀬藤金美

天幕深雪

鳳美香

月島弓雁

時雨山大学院関係者

宮本フレア

佐々木メト口

柳生青兵衛

風魔雷薙

賢橋小学校の関係者

平尾隆太

宝極真

群馬県警関係者

山村ミサオ

如月羽鳥

その他

黒澤揚羽

栗栖野煉

貴島サキ

愛川純

氷室遊泳

卯月野兎

水無月狐

狗山猪彦

猿崎鶏美

朧屋陽

水島陽太

大河内雷牙

雪風時音

湯江あずみ

竜牙隼人

能代菊菜

灯火睦月

鈴木綾子

流音三稜

向日木凧

時津正宗  
不炎明日奈  
金泉躑躅  
室鬪樹  
金雪鉄泉  
砥草根風蘭

デュリオア

「見てもらってわかる通り、ディティクティブマスターだけじゃなく関係者も何人が失踪している。この集団失踪事件が誰によって引き起こされたものかどうかは、まだわかってないんだ。」

たくま

「もしかして、壊滅させたハズのペンデュラムアッドに残党がいたんじゃないか？」

マリア（東尾）

「ありえる話やな。実際壊滅時にほとんど逮捕されたけど、まだ捕まっとらんヤツも少数おったし。」

元太

「だけどさ、いくらその少数の残党がいたとしても、果たして集団失踪事件を起こせる実力があるのかな？そもそも普通に挑んでも返り討ちにされるだろ？」

ユリ

「元太君の推理は的を得てるわ。そんな手段があるのかしら？」

結

「1つだけ、ありますよ。」

ナギ

「何だって！それは一体何なのだ、結！？」

結は軽く息を吸うと、口を開いた。

結

「催眠等による洗脳……です。」

コナン達は、しばらく沈黙していた……

## 第1章 - 4 : 風月達3人の豹変

結

「催眠等による洗脳・・・それなら、たとえデイトイテイクタイプマスターであろうと容易に操る事ができます。」

コナン

「洗脳か。」

哀

「そういえば、以前蘭さん達4人が黄の組織の人間に操られた事があったわよね。」

蘭

「ええ。」

歩

「でもあの時はミサンガがあつたからよ。ミサンガなしで操れるほど能力が高いエスパーなんているのかしら?」

ヒナギク

「この中でなら、たとえばデュン君とか・・・」

デュリオア

「あのなあ・・・オレは確かに催眠能力ヒュプノを持つてるが、48人+の人間を洗脳できる力なんかねえよ・・・」

ユリ

「そうよ、姿無き亡霊じゃあるまいし。」

コナン

「それもそうだな。じゃあ、各自でこの事件を調べてみよう。」

哀

「そうね。」

コナン達は、解散した。

コナンと哀は、米花町を歩いていた。

コナン

「この事件、一体誰が絡んでるんだろうな？」

哀

「ペンデュラムは壊滅したはずだし・・・」

コナンと哀は話をしている。

そんな2人の目に、見知った3人が見えた。

コナン

「暁君！」

哀

「風月ちゃん、美希さん！」

そう、行方不明になっていた3人だ。

コナン

「探したよ、3人共！」

哀

「帰りましょ？みんな待ってるわ。」

コナンと哀が話しかけるが、3人は黙っている。

次の瞬間、3人は攻撃してきた。

風月

「サプライズ！」

暁

「ブレイズ！」

美希

「プラスマ！」

3人の攻撃をコナンと哀はかろうじて避ける。

コナン

「いきなり何するんだ！」

哀

「私達の事忘れたの!？」

コナンと哀が3人に話しかけると、風月達は思いもかけぬ一言を言った。

風月

「あなた達……」

暁

「何者だ？」

美希

「どうして私達の名前を知っている？」

コナン・哀

「な……何言ってるの3人共!？」

コナンと哀はたじろいでいる。

風月

「もう1度聞く。どうして私達の名前を知ってる？」

暁

「答えぬなら……オマエ達はオレ達の敵だ!!」

風月達3人は、さっきよりも強大な攻撃を放った。

ドン!!

コナン・哀

「あ……」

コナンと哀はうつろたえている。

3人の攻撃が当たりそうになった、まさにその時・・・

「潮騒の一閃!!」

突然現れた泉が、3人の攻撃を防いだ。

キーン!!

コナン

「泉ちゃん!」

泉

「良かった、間に合った!!」

哀

「泉さん、どうしてここに!？」

たくま

「あの後何となく不安になったから、オマエ達の後を追ってたのだ。」

マリア

「まさかホンマに厄介事に巻き込まれてるとは思わへんかったけど。」

マリア・たくま・泉の3人は、コナンと哀をかばうように前に立った。

マリア

「さて、見たトコ前みたいにミサンガらしき物についてへんみたい

やけど・・・どないする?」

たくま

「そうだな・・・」

2人が考えていると、風月達は逃げた。

バツ!

たくま

「ああ!?!」

マリア

「逃げよつた!」

泉

「2人があれこれ考えてるからだよ・・・」

マリア

「まあええわ。とにかく白皇に戻るで!」

コナン達は、白皇学院へと戻った。

第1章 - 5 : 保護された揚羽達、次なる標的

コナンと哀が白皇の時計塔に戻ると、ヒナギク達も集まっていた。

ヒナギク

「2人共無事だったのね！」

コナン

「2人共って事は、ヒナギクさん達も襲われたのか？」

ヒナギク

「ええ。私と歩、東宮君はハヤテ君・愛沢さん・千桜の3人に・・・

」

ジン

「オレと蘭は揚羽・煉と戦った。」

蘭

「幸い2人共途中で気絶したから、連れ帰って来たの。」

ジンと蘭がそう言うと、キャンティとコロンが目を覚ました。

キャンティ

「う・・・」

コロン

「頭、痛い・・・」

ジン

「目を覚ましたか。」

キャンティ

「お父さん！義母さん！」

コルン

「ここは、白皇か・・・」

蘭

「何があつたのか話してくれない？」

キャンティ

「アタイとコルンは捜査会議が終わった後、2人でデートしてたの。そしたらいきなり怪しいヤツらに囲まれて・・・」

コルン

「その後妙な光を浴びたと思ったら、気絶して・・・次に目が覚めた時は見知らぬ廃倉庫の中だった。」

蘭

「あなた達を洗脳したヤツらの顔は？」

キャンティ

「妙な仮面をつけてて、顔はハッキリ見えなかったわ。」

ジン

「ともかく、オマエ達が無事で何よりだ。」

蘭

「この分だと、新一達が遭遇したみんなも・・・」

ジン

「ああ、同じヤツの仕業だろうな。円谷君、関係者の調べはついたのか？」

光彦

「はい。中国を担当してるディティクティブマスターで、名前は恋眠花レン・ミンファという人です。今は奥穂町に自宅があるみたいです。」

琴葉

「よし、美保とエルちゃんは恋眠花の自宅に向かって。私達も別に追う。」

コナン達は、行動を開始した。

「わかった、恋眠花だな。」

「マズいよカシャツサ。この距離からじゃ、白皇の連中に先を・・・

」

カシャツサ

「フン、先は越されねえよ、スピリタス。」

カシャツサと呼ばれた男は、携帯を開いた。

理沙

「間に合いましたね。」

伊澄

「ええ。一撃で破壊するわよ。」

伊澄と理沙は、手を美保とエルが乗る車に向けた。

伊澄・理沙

「ハアツ!!」

伊澄と理沙はお札から光線を発射する。

ゴツ!!

運転していた美保は、すぐにそれに気づいた。

美保

「エル、何か来る!車から逃げるわよ!」

エル

「え?」

美保はエルを抱え、車から飛び出す。

ババツ!!

それと同時に、光線が車を貫いた。

ズドン!!

メラメラメラメラ・・・

エル

「あちゃー・・・美保の愛車が丸焦げだわ・・・」

美保

「この破壊力、伊澄ちゃんと理沙ちゃんね・・・」

奥穂町・恋眠花宅

スピリタス

「いねえし。」

カシャツサ

「別のヤツに先を越されたか。長居は無用だ、ズラかるぞ。」

カシャツサとスピリタスは、恋眠花宅を後にする。

この時カシャツサは、絵の具を踏んでいた事に気づかなかった。

## 第2章 - 1 : 新たなる犠牲者と容疑者候補

琴葉

「何？いないですって!？」

美保

「うん。室内に争ったような後があるから、犯人は恋さんを連れ去ったと思うわ。」

エル

「美保、早くみんなと合流しましょう。」

美保

「そうね・・・ん?」

美保は足元に目をやった。

美保

「（これは・・・絵の具を踏んだ後!？）」

翌日、杯戸公園で女性の遺体が発見された。

ユリ

「間違いないわ、害者は恋眠花よ。」

元太

「これで6人目か・・・」

白皇学院

コナン達は再び、白皇に集まった。

コナン

「これで犠牲者は6人になっちまったな。」

哀

「何か手がかりはないのかしら。」

コナンと哀が話していると、デュリオアが携帯を取った。

デュリオア

「もしもし、オレだ。何！？わかった。」

デュリオアは携帯を切ると、ジェイムズ達の方を向く。

デュリオア

「良い知らせだ！容疑者かもしれない男が、杯戸町のショッピングモールに現れるかも知れねえぜ？」

ジェイムズ

「本当かね？」

デュリオア

「鬼塚稔、28歳。白皇学院高等部のOBで、5年前に犠牲者の1人であるネイル・エヴァンズに痴漢の現行犯で逮捕された男だ。ん

でこつちが宝沢理菜、24歳。稔の恋人で、利善町のスナックで働いている。ヒナギクに彼女をマークさせていたんだが、やっと見つけたぜ！」

ジェイムズ達は、杯戸町のショッピングモールへと向かった。

杯戸ショッピングモールに着いたジェイムズ達は、手分けして張り込んだ。

彼らの視線は、宝沢理菜に集中している。

哀も別の場所から理菜を見ていた。

すると・・・

宝沢理菜

「稔〜！」

理菜は手を振る。

その先には鬼塚稔がいた。

美保

「現れたわね。」

エスカレーターに乗ろうとする稔。

その前に、3人の少女がエスカレーターに乗った。

エル

「ボス！子供達が鬼塚の側に・・・」

ジエイムズ

「あわてるな。確保するのは鬼塚が子供達から離れてからだ。」

やがて子供達が目的の階に着き、稔から離れて行く。

稔はもう1階分上がった後、理菜と合流した。

ジエイムズ

「よし、確保だ！」

ジエイムズの声で、美保達は動き出した。

徐々に2人との間合いを詰めていく。

しかし康太郎はあわてていたのか、コケてしまった。

ズルッ！

ドテッ！

その反動で、手帳が稔と理菜の前に落ちる。

パサッ！

鬼塚稔

「!?!」

デュリオア

「あのバカ・・・鬼塚、動くな! FBIだ!」

デュリオアは手帳を見せる。

稔

「チツ・・・」

稔は辺りを見回すと、ちょうどエスカレーターで上がって来た女性を人質に取った。

ガバツ!

「キヤアツ!!」

ヒナギク

「な!?!」

稔

「近づくな! 1歩でも近づいたらこの女殺すぞ!」

デュリオア

「鬼塚、バカなマネはよせ! そんな事しても逃げきれねえぞ!」

稔

「うるせえ!」

稔は女性の頬にナイフを突きつける。

稔

「近づくなよ？少しでも近づいたらグサリだからな・・・」

稔は後退しながらエスカレーターに乗り、降りて行く。

2階まで降りた所で、哀はキック力増強シューズのスイッチを入れ  
射出ベルトから出したボールを蹴り飛ばした。

ドン！！

ボールは弧を描き、稔を直撃する。

ドゴオ！！

稔は床に叩きつけられた。

ドシャ！

デュリオア

「ったく、手間かけさせやがって。」

デュリオアは手錠を持ち稔に近づく。

「離れて・・・」

デュリオア

「？」

理菜

「稔から離れて・・・」

何と今度は、理菜がナイフを握っていた。

ヒナギク

「理菜さん、ナイフを捨てなさい。そんな事しても何にもならないわ。」

ヒナギクは何とか理菜を説得しようとする。

理菜

「イヤよ・・・イヤ・・・」

理菜はナイフを握り、ヒナギクに向かって来た。

ダッ！

デュリオア

「あっ・・・！！」

ヒナギク

「！！」

ドスッ！！

## 第2章 - 2 : 新たな女性構成員・メスカル

ドスッ!!

理菜

「!?!」

ジェイムズ

「ぐっ……」

理菜のナイフが、ジェイムズの腹を刺していた。

理菜

「あ、ああ……」

理菜はナイフを落とす。

カラン!

ジェイムズ

「そうだ、それで良い理菜さん……これ以上、君が罪を重ねる必要はない。」

理菜

「はじめ……んなさ……い……」

理菜は泣き崩れる。

ヒナギク

「ジェイムズさん、大丈夫ですか!？」

ジェイムズ

「心配はいらん。ワシの腹は特別頑丈にできてるからな。」

デユリオア

「本当にスマネエ。オレが油断したばかりに・・・」

ジェイムズ

「なあに、白皇の生徒会長さんをこんな所でキズつけるワケにはいかないさ。」

エル

「あら?」

美保

「どしたの、エル?」

エル

「イヤ・・・人質になってた女性がないの・・・」

エルは辺りを見回していた。

杯戸ショッピングモール・地下駐車場

コツコツ、コツコツ・・・

ピタッ！

スツ・・・

「良いの？このまま行っちゃって。」

突然の少女の声に、車のドアにカギを差そうとした例の女性は動きを止める。

哀

「あの男の人に用があつたんじゃないの？クリスやローズと並ぶ変装の達人・・・メスカル！！」

メスカルと呼ばれた女性が振り返ると、哀が立っていた。

メスカル

「仕方ないじゃない・・・そうさせたのはあなたでしょ、シエリー？それに、多分あの男は犯人じゃないわ。」

哀

「ええ、利き腕の上の肩を痛めていたみたいだからね。」

メスカル

「それにしても、よくアタシだとわかつたわね？」

哀

「あなたの左足よ。靴下が膨らんでるし、そこに拳銃を隠してるんでしょ？それに鬼塚稔のナイフで頬にキズがついたハズなのに、一滴も血が流れてないわよ？」

メスカル

「フツ・・・次は血が出るマスクを作らないとね。」

メスカルはマスクを脱ぐ。

その素顔は、エメラルドグリーンのロングヘアにシルバーの瞳をした女性だった。

哀

「恐らくあなたはワザと人質になって彼に拉致され、この地下駐車場に来た所で拳銃を取り出し逆転する算段だった。まああなたなら拳銃なんか使わずとも体術で何とかなっただんでしょうけどね。」

メスカル

「あなたにホメてもらえるとは思わなかったわ。」

哀

「メスカル、どうしてペンデュラムアッドの残党が今回の連続殺人事件を調べてるの?」

メスカル

「メモリーカードよ。」

哀

「メモリーカード・・・組織の構成員のデータが入ってる、あの?」

メスカル

「そうよ、そのメモリーカード。下っ端の構成員がミスをして、あの6人の内の誰かにカードを奪われてしまったのよ。」

哀

「それじゃ、今回行方不明になった人達以外の人達の中に構成員が・  
・イヤちがう！あなたが構成員をその誰かに化けさせたんだわ！  
！」

メスカル

「ウフフ・・・」

哀

「言いなさい、誰に化けてるの？本物の人は無事なの！？」

メスカル

「教えられるのはここまで。後は自分と彼氏で調べる事ね。コード  
ネームは、アクアビット。」

哀

「アクアビット・・・」

メスカル

「そう、ジャガイモを原料とする蒸留酒・・・あ、警備員さん！  
この子、迷子みたいなんだけど。」

「え、迷子ですか？」

哀

「あ、イヤ、私は・・・」

哀は躊躇する。

そのスキに、メスカルは車を発車させた。

ブオン！

哀

「あー！」

メスカル

「グッドラック！幸運を祈ってるわ、シェリー……」

メスカルはそう言い残し、車で去って行く。

ブオオオオオ……

哀

「クソッ……！」

哀は悔しそうに拳を握りしめた。

## 第2章 - 3 : ハヤテ達3人の変身

白皇に戻った哀は、コナン達と話をしていた。

コナン

「そうか。組織の残党が今回の事件に・・・」

ユリ

「メスカルつて言えば、ローズやクリス姉に劣らぬ変装の達人よ。そのメスカルが化けさせたとなると、早く見つけないとアクアビットが化けた人の命が危ないわね。」

コナン

「そういえば、哀達はアクアビットってヤツがどんなヤツなのかわかるのか？」

哀

「さあね。私は会った事ないわ。」

ユリ

「私もないわ。性別が女って事以外はよく知らないし。」

マリア（東尾）

「八方塞がりやな・・・」

コナン

「じゃ、買い出しにでも行くか。」

哀

「そうね。少々たくさん買い込まないといけないわね。」

たくま

「気をつけるよ。」

コナン

「ああ。」

コナンと哀は、買い出しに出かけた。

コナン

「フウ、よくこんなに買ったな・・・」

哀

「白皇の資金の多さがわかるわ・・・」

コナンと哀が話しながら歩いていると、風の光線が飛んで来た。

ゴッ！！

コナン・哀

「わっ！！」

コナンと哀は間一髪でかわす。

「かわしたか。」

コナン

「ハヤテ君!!」

哀

「咲夜ちゃんと千桜ちゃんもいるわ!!」

ハヤテ

「オマエ達が誰かなんて、オレ達にはどうでも良い。」

咲夜

「ウチらは与えられた任務をやりとげるだけや。」

千桜

「あなた方2人を生け捕りにせよという任務をね。」

コナン

「オレ達2人を生け捕り!?!」

哀

「それってどういう事!?!」

ハヤテ

「知る必要はない。しばらく気絶していてもらうぞ。」

ハヤテが風の光線を放とうとしたその時、雷の光線が飛んで来た。

ゴオツ!

ハヤテ

「チイツ!!」

ハヤテ達は光線を避ける。

光線を放ったライカが、マリア・結と共に哀達の前に現れた。

ザッ！

ライカ

「何とか間に合ったか。」

コナン

「ライカさん！マリアさんも！！」

マリア

「ライカ君、ハヤテ君達は・・・」

ライカ

「ああ・・・恐らく操られてるんだろう。まあ良い。オレの雷で目え覚まさせてやる。」

ハヤテ

「フツ。やれるものなら、やってみろ！」

そう言うと、ハヤテは水色の指輪を取り出した。

ハヤテ

「永久に燃えよ、不死業火鳥フエニキア！！」

ハヤテは指輪をの力で、炎の鳥に変身した。

ゴオオ！！

咲夜

「ほな、ウチらも。」

「させません！ロンド・ナデイス！！」

結が放った光のムチが、咲夜と千桜を絡め取る。

咲夜

「うお！？」

結

「ライカさん、今の内に・・・」

咲夜

「甘いわ。千桜さん！」

千桜

「噛みちぎれ、フエンリル神速牙狼爪！！」

千桜は狼の姿に変身し、ムチを引きちぎった。

ブチイ！！

結

「な！？私のムチが破られた！？」

咲夜

「貫け、オーティン一角突馬神！！」

咲夜も槍を持った戦士に変身する。

ズアッ！！

ライカ

「コイツら・・・」

結

「一体何なんですか！？」

## 第2章 - 4 : 謎の少女・久遠木ミカゲ

ハヤテ・咲夜・千桜の3人は、指輪の力により変身した。

ライカ

「そうか、これが『あれ』か！」

結

「ライカさんは知ってるんですか？」

ライカ

「ああ、7天王の長であるユーリから話は聞いていた。ハヤテ達3人がはめてる指輪はただの指輪じゃない。『魔獣の指輪』というれつきとしたガーディアン：RINGだ。」

マリア

「魔獣の指輪？」

ライカ

「ああ・・・ハヤテ達ディティクティブマスターは、就任の際に魔獣の力が封じ込められた指輪を渡されるといっ。」

結

「それがこれですか。」

ハヤテ

「わかっていたか。」

咲夜

「なら話は早いわ。アンタらには気絶してもらおうで。」

ライカ

「させるか！迅雷の如く・八又天誅雷蛇！！」

ライカは体が8つに分かれた雷の大蛇を放った。

ズアッ！！

ハヤテ

「なるほど、これは強大だ。普通の風では消せないな・・・疾風の如く・白王鉄鼠。」

ハヤテは風でできた巨大な白ネズミを放つ。

ズオッ！！

ライカ

「な・・・何だ、コイツは！？」

ハヤテ

「オレが新しく生み出した、ペットだ。」

白ネズミは1匹の雷蛇の頭に噛みついた。

バクン！

ライカ

「何！？」

白ネズミは8つの雷蛇を次々に捕食していく。

バクバク・・・

間もなく、白ネズミは雷蛇を食べ終わった。

ゲフ！

ライカ

「バ、バカな・・・オレの奥の手の1つが破られただど！？」

ハヤテ

「オレのネズミにとって、ヘビなどエサにすぎない。次はオマエだ。」

「

ハヤテがライカに指を向ける。

すると、白ネズミは彼に飛びかかった。

バツ！

結

「ナデイス・ミオウ・ディオウ！！」

結は巨大なネコを召還し、ネズミを押し留めた。

ガシイ！

ハヤテ

「！！！」

結

「ハア、ハア……」

ハヤテ

「なるほど、ネコを召還できるヤツが居たか。命拾いしたな。咲夜、千桜、退くぞ。ミカゲ様に報告だ。」

咲夜・千桜

「はい。」

ハヤテ達3人は元の姿に戻ると、去って行った。

白皇学院

デュリオア

「ミカゲ……綾崎達は確かにそう言ったんだな？」

コナン

「ああ。」

哀

「あなたは知ってるの？」

デュリオア

「ああ……フルネームは久遠木ミカゲ……ヒュプノがベースの

合成能力者だ。だが、本来彼女がこの事件に関わってるはずがない  
！」

ユリ

「どうして？」

デュリオア

「なぜなら、ミカゲは・・・ユーリさんや綾崎達が封印したからだ・  
・・・」

コナン

「ふ・・・」

哀

「封印!？」

次回、ミカゲの過去が明かされる!!

## 第2章・5：封印された7天王・ミカゲ

デュリオア

「アイツが関わってるハズがないんだ。なぜならアイツは、封印されたんだから。」

コナン

「封印!？」

哀

「どういう事か、教えてくれる?」

ユーリ

「久遠木ミカゲ・・・ヤツはかつて、7天王の1人だったんだ・・・」

┌

哀

「え!?! 7天王って、ユーリさん・ジヨディさん・リアンちゃん・美保ちゃん・エルちゃん・鈴也君・花鳥さんの7人だったんじゃない?」

ユーリ

「それはつい最近の話だ。半年前までのな。そう、あれはちょうど47都道府県の各地にディティクティブマスター達を配置した頃だった・・・彼女はヒュプノをベースにした能力者で、当時の7天王の中でも最強の強さだった。長の候補にも入っていたくらいだから・・・」

ユーリ

「来るぞ、ミカゲ!!」

ミカゲ

「ラージア・ヒュプル!!」

ヒュゴツ!!

ミカゲは向かって来る麻薬組織の構成員達をまとめて眠らせた。

ドサツ!

ジヨデイ

「いつもながらスゴい力ね・・・」

ミカゲ

「う・・・」

花鳥

「どうしたの、ミカゲちゃん?」

ミカゲ

「うああ・・・ギガム・ヒュプル!!」

ミカゲは強大な催眠波をユーリ達に向け放った。

ゴツ!!

エル

「クッ！！私達の防御術じゃふせぎきれない・・・」

美保

「ユーリさん、お願い！！」

ユーリ

「ギガンド・グラビドン！！」

ゴズン！！

ユーリはミカゲを重力で押し潰した。

ミカゲ

「う・・・」

ミカゲは気絶する。

ジヨデイ

「またこの暴走ね・・・」

リアン

「ユーリ兄、どないしょ？」

ユーリ

「そうだな・・・」

ジェイムズ

「ミカゲ君はまた暴走したのかね？」

ユーリ

「はい、ほぼ毎回任務後に暴走しています。どうしたものでしょう？」

ジェイムズ

「フム……」

ミカゲ

「それなら良い案があります。」

ジェイムズ

「ミ、ミカゲ君！？」

ミカゲ

「私を封印すれば良いのです。」

ジェイムズ

「良いのかね、ミカゲ君はそれで？」

ミカゲ

「はい。元はといえば私の能力が未熟であるのが原因。なので……」

「

ユーリ

「案としては良いと思うが……ミカゲがいないと7天王に欠員が……」

「

松葉

「それなら問題あらへん。」

ユーリ

「うお、松葉ちゃん！どこから出て来た!？」

松葉

「さつきからおったんやけどなあ。」

ユーリ

「君、忍びだから気配がねえんだよ……」

ジェイムズ

「それで、問題ないと言うのは？」

松葉

「鈴也を入れたらええ。鈴也かて実力は折り紙つきや。」

ジェイムズ

「鈴也君か……」

ユーリ

「確かに鈴也君ならいけるかもな。」

ジェイムズ

「それで、ミカゲ君は本当に良いんだな？」

ミカゲ

「はい。」

その後、7天王と48人のディティクティブマスター達の力により久遠木ミカゲは封印され、7天王には鈴也が加わったのだった。

### 第3章・1：ペンデュラムアッドの6人の残党

哀

「じゃあ、ユーリさん達は同志を封印したって事？」

ユーリ

「ああ、これはミカゲちゃん自身が望んだ事だったし・・・何よりこれで、危険は去ったと思われていた・・・」

デュリオア

「だが、世の中にはまだいたんだ・・・ミカゲの力を悪用するため彼女の封印を解き放った・・・ペンデュラムアッドの残党が・・・！！」

スピリタス

「うまくいったね、カシャツサ。」

カシャツサ

「ああ、オレの予想は正しかった。48人のディテイクティブマスター達を拉致し、彼らをオレのヒュプノで洗脳させれば封印の力は弱まる。さすがにユーリ達7天王を拉致する事まではできなかったが、オレ達の魔力で封印を解き放つには十分だった。」

ペンデュラムアッドの残党が6人、ロシアの地に立っていた。

カシャツサ・スピリタス・メスカル・マール・ミード、そしてアクアビット。

1人1人がかなりの手練れだ。

ブロンドのロングヘアの男、カシャツサ。

シルバーのショートヘアで帽子とサングラスをした男、スピリタス。

エメラルドグリーンロングヘアの女性、メスカル。

ピンクのショートボブの女性、マール。

紫のボブカットで暗視メガネと帽子をした女性、ミード。

そしてセルリアンブルーのロングヘアの女性、アクアビット。

マール

「FBIの連中に、目にももの見せてやる！」

ミード

「私、早く撃ちたい。」

カシャツサ

「そう急くな。オマエ達にも役目はやるさ。ところで、アクアビット。」

アクアビット

「何よ、カシャツサ？」

カシャツサ

「オマエここのトコ、ミカゲを連れて2時間ほど連絡してこない事

があるだろ。一体何をやっている？」

アクアビット

「あら、それをあなたに言う必要があるワケ？女のプライベートに男は口を挟まないものよ。」

カシャツサ

「フン・・・とにかくオマエは与えられている任務を果たす事に集中すれば良い。それ以外は特に問わん。」

アクアビット

「はいはい、わかったわよ。じゃ、ちょっと買い物に行つて来るわ。」

そう言うと、アクアビットは走り出した。

コンビニに着くと、アクアビットは足を止める。

アクアビット

「フン！何よカシャツサのヤツ、えらそうに・・・」

アクアビットは舌打ちをした。

ジン

「メスカルはアクアビットの他に、4人の残党とつるんでいた。その中に、カシヤツサという男がいるハズだ。」

コナン

「ジンはカシヤツサってヤツの事を知っているのか？」

ジン

「ああ、オレのイトコだよ。」

蘭

「ジンの？」

ジン

「まあヤツはオレと違って血がドス黒く染まり過ぎてる上に、仲間を殺す事も平気ですからな。オレとは折り合いが悪かったんだ。」

哀

「そついえばカシヤツサのヤツ、昔任務に失敗した構成員をバラバラに惨殺しちゃった事があつたわよね？」

ジン

「ああ。確かその構成員の名前は……」

アクアビット

「ナポレオン……アタシの夫になるハズだった人……カシヤツサ……ヤツだけは、アタシがこの手で……」

### 第3章・2：アクアビットの胸の内・3人娘の襲撃

アクアビット

「大切なあの人を殺したアイツだけは・・・アタシがこの手で葬つてやる！！」

ミカゲ

「あの、アクアビットさん・・・私はあなたを信頼しています。だから教えていただけませんか？どうして工藤新一君とシエリーに執着するのかを。」

アクアビット

「それはね・・・ヤツを・・・カシヤツサを蹴落とすためよ。」

ミカゲ

「カシヤツサさんを？」

アクアビット

「ええ。今アタシ達を仕切っているのはカシヤツサ。でもアタシはアイツには恨みがある。だから協力してほしいのよ、あなたに。」

ミカゲ

「わかりました。私にできる事なら何でも協力します！」

アクアビット

「ありがとう。さて、そろそろあの子達にも動いてもらいましょうか・・・」

歩はヒナギクと別行動を取っていた。

歩

「ヒナギクの話じゃ、洗脳されたみんなはコナン君と哀ちゃんを狙ってる・・・私も頑張らないとね。」

「別に頑張らなくて良いじゃん？アンタはここで倒れるんだからさあ・・・」

歩

「？誰！？」

歩が辺りを見回すと、空中から声が聞こえた。

天幕深雪

「アタシは天幕深雪。」

月島弓雁

「ウチは月島弓雁。」

鳳美香

「私は鳳美香。」

歩

「48人いるディティクティブマスターの内の3人ね。」

深雪

「知ってたの？なら話は早いわ。工藤新一君とシェリーの居場所、教えなさい。」

歩

「アタシを倒せたらね!!」

そう言うと、歩は走り出した。

ダッ!

美香

「逃げた・・・」

弓雁

「追うで!」

深雪達も後を追って行く。

歩は携帯のメールで仲間達に連絡した。

ピッ!

歩

「これでよし。」

深雪

「何コソコソしてんのよ!!」

深雪は花びらの手裏剣を放った。

ヒュヒュヒュ!

歩

「影氷斬!」

ヒュゴ!

バキイン!

歩は手裏剣を凍らせ、叩き斬る。

歩

「影炎斬!」

歩は続いて、炎弾を放った。

ゴッ!

弓雁は鉄拳で弾く。

深雪

「なるほど、アンタ二刀流なのね。でもその程度でアタシ達を倒せるかしら?」

歩

「倒すつもりは始めからないわ。時間稼ぎできれば良いのよ。30分程ね。」

美香

「面白い・・・」

深雪

「果たしてアンタに30分もアタシ達の攻撃に耐える力があるかしら?」

30分後・・・

歩

「ハアハア、ハアハア・・・」

歩は汗をかいている。

深雪

「30分でその程度?意外と早くバテんのね。でも、もう終わりよ。」

「

歩

「・・・来た!!!」

深雪

「ん?何が来たって・・・」

「ビーンズ・キャノン!!!」

突然飛んできた豆のミサイルに、深雪は避けられず当たった。

ドゴォー!!!

深雪

「グツ!？」

歩

「やっと来たわね・・・康太郎!!」

そこに立っていたのは、東宮康太郎だった。

### 第3章 - 3 : 深雪達3人と合成魔獣

歩

「早かったわね、康太郎。」

康太郎

「フォウの力で地面を凍らせて滑って来たからね。」

「終わった？くだらないおしゃべりは。」

深雪の声と共に、輪っか状の武器が飛んで来た。

ボツ！！

歩

「影炎斬！！」

歩は影炎斬を振るい、輪っかを弾いた。

ガキーン！

ギャリ！

深雪

「・・・なるほどね。さっきの砲撃はそっちのガキの能力か。見た  
トコ植物使いみたいだけど・・・その程度の攻撃力じゃ、3VS1  
と大差ないわよ。」

ガン！

ジャゴ!

深雪は両手に花びらを模した手裏剣を持った。

弓雁は大剣を、美香は烏の羽を模した武器を取り出す。

ガシャン!

ジャツ!

深雪

「弓雁!美香!終わりにするわよ!!!こんな戦いサツサと終わらして2人を探しに行くんだよ!!!」

弓雁

「仕切んなアホ。」

美香

「一番ダラダラしてたのはアンタでしょ。」

弓雁

「でもまあ、」

美香

「意見には同感だわ。」

そう言うと、深雪達は歩と康太郎に突っ込む。

ドン!!!

深雪

「じゃあね！二刀流女！！」

その時、3人は謎の網に掛かった。

ピン！

深雪

「何よ、これ・・・」

康太郎

「気づかなかった？最初にボクがどうやってあなたにビーンズキヤノンを命中させたのか。あなた達は皆ボクよりずっと強い。ビーンズキヤノンを当てられるギリギリの距離まで近づくためには、魔力で姿も気配も消して近づく必要があった・・・だから姿を消したついでに、歩の周りにビーンズウィップの網を張り巡らせておいたんだ。まさか、3人共かかってくれるとは思わなかったけど。」

深雪

「ガキが・・・」

康太郎

「やれ、鬼火属フォレ！」

シュボツ！

鬼火属フォレに火をつけられ、網は大爆発した。

ドン！！

その頃他のアルメンバーも、それぞれ敵と対峙していた。

真希と実希は、水上で銀一と金美に。

ヒナギクとアテネは、溶鉱炉で伊澄と理沙に。

泉・マリア（東尾）・たくまは、廃ビルで美希・風月・暁に。

ライカ・マリア・シトラスは、江古田の森でハヤテ・咲夜・千桜に。

松葉と鈴也は、嵐山でフレア達に。

歩

「・・・大丈夫？康太郎・・・」

康太郎

「・・・うん。ゴメン、初めて使った戦法だから・・・」

歩

「良いのよ。ビーンズウィップをこんな長く網状に張ったのは初めて見たわ。」

康太郎

「うん。ビーンズウィップのツルをメフトス・フォレ・フォウの3人に伸ばしてもらって網状に張り巡らせたんだ。」

歩

「（スゴいわ・・・ここまで強力な技を使うなんて・・・この子・・・しばらく見ない間にこんなに力をつけてたのね・・・）」

康太郎

「集中するのは大変だったけど、うまく行って良かった。」

歩

「（良かった。思ったよりたくましくなったわね・・・）」

その時・・・

ズ・・・

歩

「!?!」

深雪

「咲き乱れる、ラフレシア怪美兔葉花!?!」

弓雁

「喰い破れ、アルテミス月輪犬熊将!?!」

美香

「啄み殺せ、ヤタガラス夜闇鳳骸鳥。」

歩

「……………」

康太郎

「……………」

深雪は両腕と背中に9枚の花びらを生やし頭にウサギの耳をつけた桃服の姿に、弓雁は三日月型の大剣を握った黄服の水着姿に、そして美香は両手を翼に変えた黒服の姿に変化していた。

それぞれウサギ、イヌグマ、カラスを模した姿をしている。

康太郎

「今ので倒すまではいかなと思ってたけど……ほとんど無傷なんて……………」

歩

「能力を解放するとダメージが回復するの。そういう人達よ、ディイクティブマスター達は。」

深雪

「クソ……調子に乗りやがって……………」

弓雁

「長引かせた方が面倒そうや。アレで一気に片づけんで。」

美香

「……………仕方ないわね。」

深雪・弓雁・美香

「キメラ・ヴァルガ混魔獣女神！！！！」

そう言うと、深雪達は自らの体をキズつけ血液を吹き出した。

バシユ！！

歩・康太郎

「！？」

3人の血液が、混ざり合う。

ギユル！

そして、1体の魔獣となった。

歩

「・・・な・・・何よ・・・アレ・・・！？」

### 第3章・4：悪夢の魔獣・ジエミニ

ズズズ……

歩

「……な……何よ……アレ……!？」

その姿は、背中と両腕に9の花びらを生やし、熊の身体に鳥の翼が生えた異形の魔獣だった。

深雪

「『キメラ・ヴァルガ』。能力を解放したアタシ達3人の血液を混ぜ合わせて創った、アタシ達のペットよ。名前は『ジエミニ』。」

ドクン……

歩

「(何……?この寒気……底無しの深穴を覗き込んだみたいなの……)」

突然突っ込んで来るジエミニ。

ドン!!

歩

「!!影氷斬!!」

歩は影氷斬を構えたが、右の腹を強く斬られた。

ザン！！

深雪

「ああ、言い忘れてた。ジエミニは死ぬほど強いから、気をつけなさいよ。」

グラツ！

康太郎

「歩！！」

ガツ！

落ちて行く歩を受け止めた康太郎は、ツルの網を張った。

康太郎

「ウィップネット！！」

ドン！！

康太郎

「待ってて歩！すぐホーリー…RINGで…」

ザツ！

康太郎

「！！」

歩を治癒しようとする康太郎の前に現れたジエミニは、鉄拳を康太郎のお腹に叩き込んだ。

ズン!!

康太郎

「(ボクも・・・歩も・・・一撃・・・メチャクチャだ・・・こんな・・・勝てるワケないよ・・・)」

「ローズ・ネット!!」

突然の声で現れたバラの網が、康太郎を受け止める。

ドッ!

ギョルン!

そこには加勢にきた氷室と煉華の姿があった。

氷室

「よく頑張った。少し休んでるんだ康太郎坊ちゃん。コイツは、ボク達が片づける。」

深雪

「・・・あん?何よアイツら?」

美香

「仲間でしょ。向こうから来たのを見たわ。」

深雪

「見てたのなら何で止めないのよアンタ・・・チツ・・・次々と手助けに来やがって・・・他人の戦いに手出すのが好きな連中ね・・・」

ジエミニー！手出すヒマなんかやるな！とつとと殺れ！！ジエミニー！  
！・・・シカトかよあのヤロウ・・・」

弓雁

「止めんかアホ。ジエミニにウチらの言葉なんか聞こえるワケない  
やる。」

深雪

「どっかに鼓膜くらいついてんでしょ！ねえ！？」

美香

「知らないわ。あの子が私達のセリフに反応するの見た事ないし。」

深雪

「・・・チツ、やっぱり出すんじゃないわね・・・こんな気味  
悪いの・・・」

氷室

「煉華。コイツはボクが引き受けとく。君は康太郎坊ちゃんと歩君  
を頼む。」

煉華

「良いの？丸投げしちゃって。」

氷室

「誰が丸投げしろって言った！応急処置したら術で目隠ししてこっ  
ちに加勢するんだよ！特に歩君は急がないとヤバい。頼んだよ、元  
救護婦長。」

煉華

「いつの話をしてるのよ。」

氷室

「行くぞ。」

煉華

「そろしましょ。」

氷室はムチを引っ張り、ジエミニを引き寄せせる。

ギョーン！

その間に煉華は歩を救出した。

ザッ！

ヒュン！

煉華

「少し待ってて康太郎！すぐ治療する！」

康太郎

「ボクは・・・大丈夫・・・歩を早く・・・」

煉華

「（康太郎だつて相当マズい・・・あの一撃だ、肺に肋骨が刺さるか、最悪片方が潰れてるハズだわ・・・だけど、歩ちゃんはもっとマズい・・・！お願い・・・腕が鈍ってるんじゃないわよ・・・！）」

┌

氷室

「（得体の知れないヤツだ・・・間合い取って様子見といくか。）  
ローズ・アースボルト！」

氷室はムチを伝う電撃をジェミニに当てた。

バチィ！

氷室

「（効果あつたか！？）」

シャツ！

ズン！！

氷室

「（効いてる！いけるぞ！コイツ電気系が弱点か！）」

ダンツ！

氷室はジェミニの背後に回ろうとしたが、ジェミニは首を360度  
回した。

グリーン！

氷室

「！！！」

ブン！

ザッ！

ズダン！

グリユン！

氷室

「・・・化物が・・・！」

ジエミニはムチを引きちぎった。

ブチン！

氷室

「簡単に切りやがって・・・いつでもできましたっか？」

ジエミニは突然突っ込むと、氷室を掴んだ。

ドン！

ガッ！

氷室

「しまっ・・・」

ジエミニは口を開ける。

グバァ！

その背後に、野々原楓が迫っていた。

楓

「（まだ反応してない！！いけるか！？）」

すると突然、ジェミニの左の髪の毛から目が飛び出した。

ギョル！

楓

「！！セーフティージャツ超爆裂炎冥斬・・・」

ジェミニは光線で楓を撃ち抜いた。

カツ！！

氷室

「楓！！」

ジェミニは氷室を握り潰す。

ボキ、ゴキ！

氷室

「グアアアアア！！」

ポイツ！

ジェミニは氷室を投げ捨てると、煉華がいる方向に向かい始めた。

ズン！

煉華

「く……来る……後少しなのに……!!」

ジエミニが煉華の方に着こうとしたまさにその時……

「イフリティアカノン!!」

ドン!!

犬美

「やれやれ……アタシを出させるとは、情けない子達ね。」

イフリートこと犬美が、ジエミニの左腹部を撃ち抜いていた。

### 第3章 - 5 : 火呪摩犬美の恐るべき強さ

煉華

「か・・・火呪摩・・・犬美さん・・・!!」

火呪摩カジマ犬美イナミ

「やれやれ・・・アタシを出させるとは・・・情けない子達ね。」

煉華

「も・・・申し訳ありません・・・!!」

犬美

「ホラ、それがいけないのよ。アタシに謝罪するヒマがあったら、敵を見なさい。」

ジエミニ「オ・・・オオオオオオオオオ!!」

ジエミニは体の穴を塞ぎながら、咆哮した。

煉華

「そんな・・・あの状態で・・・死なないの・・・」

犬美

「フム・・・どうやら、お仕置きが足りないみたいね。燃え盛れ・・・  
アラビアンサラマンデー  
・灼熱業火犬女神。」

犬美は戦闘形態に変身した。

ジエミニ「オオオオオ!!」

ジェミニは犬美に拳を振り下ろす。

ゴッー!!

だが、犬美は振り下ろされた拳の横にいた。

犬美

「何だ。届いてないわよ。」

ギョーン!

犬美

「人を・・・殺める事しか眼中にない物の怪か。哀れね。」

ジェミニ「オオオオオ!!」

犬美

アラビアンサラマンディ  
「灼熱業火犬女神、一火目・・・辻斬。」

犬美は右腕についた剣で、ジェミニを3つに斬り裂いた。

ズバツー!!

ズウウウン!

しかし、まだジェミニは生きている。

ジェミニ「オオオオオ・・・」

犬美

「やれやれ・・・もう止しなさいよ。あなたみたいな哀れな魔獣を何度も斬るのは、気が重いわ。」

ジエミニ『ガアアアアア!!』

グアツ!

犬美

「・・・止しなさいと言うのが・・・わからないのかしら、小娘。」

ボツ!!

犬美に近づいたジエミニは、一瞬にして焼き尽くされた。

ボオオオオオ・・・

煉華

「・・・スゴい・・・あの化け物を、一撃で・・・!!」

犬美

「まだよ、煉華ちゃん。」

犬美の真上に、深雪達3人が現れた。

ドン!!

弓雁

「お、」

深雪

「りゃあー!!」

犬美

「手負いで挑む、その意気は良いわ。二火目、ふたひめ火山花。カザンカ」

ボツ!!

犬美

「その意気に免じて、火傷程度で済ましておいてあげる。」

弓雁

「・・・ク・・・」

深雪

「ソツ・・・」

深雪達は炎に包まれながら、地面に落下した。

ドザァ・・・

琴美

「・・・そう、わかったわ。」

瑛祐

「どうした、琴美？」

琴美

「偵察中の仲間から連絡よ。深雪達がやられたと……アタシ達もそろそろ出向くべきかと。」

瑛祐

「そつだな。何人が引き連れて、行くとするか。」

#### 第4章 - 1 : 瀬藤姉弟の合体

犬美が深雪達3人を倒した頃、淡路島近くで銀一・金美と戦っていた真希と実希は次第に追い詰められていた。

真希・実希

「ハアハア……」

銀一

「どうした？30分戦ってこの程度か？」

金美

「結末は見えたわね。」

2人がそう言っていると、金美の携帯が鳴った。

ピリリ、ピリリ！

金美

「もしもし？こちら金美……わかったわ。」

ピッ！

銀一

「どうした？」

金美

「深雪達3人がやられたわ。」

実希

「よっしゃー！」

真希

「じゃあ、私達もそろそろ……」

銀一

「そんなこつたろうと思ったぜ。オマエら、手を抜いてただろ？」

金美

「ナメてくれるわね……その余裕、すぐに絶望に変えてあげるわ！」

銀一と金美は指輪を取り出した。

銀一

「オレ達の指輪は2つで1つ。」

金美

「アタシ達は2人で1人の力となる。」

銀一・金美

「吹き飛ばせ、ウロホロス金炎銀風龍。」

カッ！

金美と銀一は合体し、2つ首のドラゴンになった。

銀一

「さあ、見せてみる。」

金美

「あなた達の本気を。」

真希

「言われなくてもそのつもりよ！実希！！」

実希

「了解や！！」

真希・実希

「シルン・マミキ・ユグノウス！！」

カツ！

真希と実希は合体し、真実希になった。

真実希

「教えてあげましょう。私の力というものを！！ギガム・ラミル！！」

金美

「ゴルド  
フレイム金色の息吹！！」

真実希とウロボロスの攻撃が、激突した。

ドゴオ！！

その頃ヒナギクとアテネは、溶鉱炉にて伊澄・理沙と戦っていた。

ヒナギク

「ハアツ!!」

ブンツ!

伊澄

「くっ……」

アテネ

「黒竜波!!」

ゴツ!!

理沙

「わっ!!」

ザザツ!

理沙

「強いですね、この人達。」

伊澄

「やはり能力を解放した方が良さそうね。行くわよ、リン!」

理沙

「はい、伊澄君!」

サツ！

理沙

「光り輝け、バステイト光猫魔巫女！！」

伊澄

「闇を照らせ、セクメディ闇獅子巫女！！」

カツ！

理沙はネコ娘のような姿に、伊澄はライオンのような姿になった。

ヒナギク

「鷺之宮さん達も本気を出してきましたね。どうします、天王州理事長？」

アテネ

「その呼び方は止めなさいと言ったでしょ？後、私に敬語はなしですわ。」

ヒナギク

「じゃあ、アーたん！どうする？」

アテネ

「あなた、しばかれないの？」

ヒナギク

「ゴメンナサイ・・・」

アテネ

「その名を呼んで良いのはハヤテだけですの。まあこの戦いに勝つたら、あなたも呼んで良いですよ？」

ヒナギク

「じゃあ、頑張ろう！アテネ！！」

アテネ

「そうですわね、ヒナギク！！」



ヒナギク

「よそ見はいけないわよ、鷺之宮さん？花椿波動弾！！」

ヒナギクは正宗を突き出し、気合いの球を放った。

ドンツッ！

伊澄

「フツ……八葉六式・反射の防壁。」

ズアツッ！

伊澄の目の前に現れた壁が、ヒナギクの攻撃を跳ね返した。

バチン！

ヒナギク

「ウソ！？」

伊澄

「油断してるのはあなたの方よ。そのまま自分の技にやられなさい！！」

ヒナギク

「あ……あ……」

アテネ

「白竜防花弁！！」

アテネは白い花びらの盾で、波動弾を弾いた。

ガキン！

伊澄

「あら、まあ。」

アテネ

「油断し過ぎですわよ、ヒナギク！」

ヒナギク

「ゴメンナサイ……」

アテネ

「ヒナギク、3分間彼女達を引きつけておいて。良い手が思いつき  
ましたわ。」

ヒナギク

「ええ！私があ！？」

アテネ

「お願いしますわ！！」

アテネは溶鉱炉の方へと走って行った。

タタタ……

ヒナギク

「ちよっ……」

伊澄

「八葉六式・雷光破!!」

伊澄は雷の光弾を放った。

ドン!!

ヒナギク

「キヤッ!!」

理沙

「休ませないよ。八葉六式・猫又冷光鞭!!」

理沙も氷のムチでヒナギクを攻撃する。

ヒナギク

「2人の攻撃を避けきるなんて、とてもムリよ!!」

ヒナギクはそう言いながらも、正宗を振るい2人の攻撃を避けている。

ヒナギク

「ハアハア・・・」

伊澄

「そろそろチェックメイトといきましょうか?」

ヒナギク

「う・・・もうダメ・・・」

アテネ

「待たせたわね、ヒナギク！」

アテネは溶鉱炉の上に乗っていた。

ヒナギク

「アテネ……」

ヒナギクは片ヒザをつく。

アテネ

「さあ、今度は私の番ですわ。真・眼・アテネラス・アカガネホウオウザン赤銅鳳凰斬！  
！！」

カツ！

伊澄・理沙

「？」

ドゴオツ！！

伊澄・理沙

「キャッ！！」

伊澄と理沙は地面から飛び出した鳥に突き上げられた。

ヒナギク

「アテネ、このままだと2人共溶鉱炉に……」

アテネ

「心配ありませんわ。」

ヒナギク

「え．．．？」

ヒナギクは鳥に乗り、溶鉱炉の上上がった。

ヒナギク

「あ．．．」

伊澄と理沙は、溶鉱炉の中にできた氷の上で気絶している。

アテネ

「白竜冷凍波。溶鉱炉の上から冷凍光線を放ち、溶鉱炉の中を凍らせておいたの。人の1人や2人乗ったぐらいでは、簡単には割れませんわ。」

ヒナギク

「それ先に言っよ．．．」

ヒナギクはため息をつきながら、アテネと共に伊澄と理沙を救出した。

第4章・3：鈴也頑張る！倒せ、4忍者！！

真実希

「ラミル・エルド！！」

真実希は光の棍棒を取り出すと、2つ首のドラゴンに殴りかかった。

真実希

「やああー！！」

銀一

「甘いわ！シルバー・ストーム！！」

銀一は口から風の光線を放つ。

ゴオツ！！

真実希

「ハアアアアア！！」

真実希は棍棒を振り回し、光線を弾き返した。

バチン！

光線が金美に当たる。

ゴツ！！

金美

「キャン!!」

銀一

「金美!!」

真実希

「甘いのはどっちですか？ガスン・ゴウ・ラミルガ!!」

真実希は光の弾丸を連射する。

ガガガガガガン!!

銀一

「グツ!!」

金美

「ナメてくれるわね・・・最強技でいくわよ、銀一!!」

銀一

「ああ。後悔させてやるっ・・・」

金美

「フレイム・・・」

銀一

「ストーム・・・」

金美・銀一

「シンクロブレスド!!」

金美と銀一は口から炎と風の光線を放った。

ゴオッ!!

真実希

「フツ・・・」

真実希は片手で光線を止めた。

ピタッ!

銀一

「な・・・片手で・・・」

真実希

「シルン・ジオマミキ・アブソリユージョン!!!!!!」

ブアッ!!

金美・銀一

「ウアアアアア!!!」

金美と銀一は元の姿に戻り、海へと落下した。

ドボオン!!

真実希

「瀬藤姉弟・・・恐ろしい相手でした・・・」

真実希は海へと飛び込むと、金美と銀一を救助した。

嵐山

松葉と鈴也は、嵐山で同級生達と戦闘になっていた。

フレア

「吹雪け、ヒスイチヨ翡翠氷河蝶！！」

メトロ

「さざめけ、シケーデイ狂音響鳴蝉！！」

青兵衛

「毒刺せ、アンタレス土砂地飛蠍！！」

雷薙

「眩け、モルフィス毒目眩炎蛾！！」

フレア達は4人共昆虫人の姿に変身した。

鈴也

「4人共変身したか。どうする、松葉？」

松葉

「鈴也、3分間だけ囷になってくれへん？」

鈴也

「ハア？何言ってるんだオマエ……」

松葉

「頼むで！！」

ヒュン！

鈴也

「ちよっ……」

フレア

「3分間どころか1分も保たないわよ、あなたじゃね。」

鈴也

「ナメるなよ……刺し崩せ、水敏捷流蜂ホーネット！！」

ドン！！

鈴也はスズメバチを模した姿に変身した。

鈴也

「喰らえ、ニードルショット！！」

パシユ！！

メトロ

「その程度で3分耐えるつもりか？」

雷薙

「片腹痛い……」

青兵衛

「すぐに片をつけてやる……」

鈴也は4人を倒せるか!?

#### 第4章 - 4 : 松葉覚醒！大陸の女戦士グラードン！！

鈴也

「ハンドレッド・ニードルガン！！」

鈴也は全身から1000の針を弾丸として放った。

ガガガガガ！！

青兵衛

「チイツ、無数の弾丸で防戦一方にし、反撃の余地をなくすか？相変わらずコシヤクな手を使う。」

メトロ

「だが所詮飛んでいる我々にはカスダメージだ！インセクトスクリーム！！」

メトロは羽根を飛ばたかせ、怪音波を放った。

ビィィィィ！！

鈴也

「クッ！うるさい音だな・・・」

雷雑

「エレキ・・・」

フレア

「マグマ・・・」

雷雫・フレア

「ダブルストーム!!」

雷雫とフレアは雷と炎を風に乗せ、嵐と化して放った。

ゴオッ!!

鈴也

「クツ! ニードレス・バリアオール!!」

鈴也は針を無数に飛ばし、盾状に回転させた。

ギャルルル・・・

鈴也

「どうだ! 無数に回転する針の盾をかいくぐって、オレに攻撃を当てられるか!？」

青兵衛

「だからオマエは甘いのだ・・・その程度の防御術で凌げると思っているとは・・・サンド・ストーム!!」

青兵衛は両手のハサミをクロスさせ、砂嵐を発生させた。

ゴオッ!!

鈴也

「クツ・・・砂嵐で盾が吹き飛ばされる・・・」

雷薙・フレア

「エレキ&マグマストーム!!」

間髪入れず放たれた雷と炎の竜巻が、鈴也を直撃した。

ズバツ!!

鈴也

「うあつ……」

ドッ!

青兵衛

「雷薙、メトロ、フレア……トドメを刺すぞ。」

雷薙・メトロ・フレア

「了解……」

青兵衛達は、四方から鈴也に接近する。

ザツザツ……

鈴也

「……3分。」

青兵衛

「……何だと?」

鈴也

「3分間時間稼ぎをする。この指示は守ったぞ、松葉……」

松葉

「それで良いのよ、鈴也……」

メトロ

「松葉の声!？」

雷薙・フレア

「どこにいる!？」

松葉

「大陸を揺らせ……古代地炎竜グラードン!!!」

ズズズズズ……

大地を揺らすように、超巨大な赤いトカゲが現れた。

ズン!!

鈴也

「これが……能力を解放した松葉……」

松葉

「喰らいなさい!噴火!!」

ドン!!

松葉の噴火が、青兵衛とメトロを直撃する。

ゴガン!!

メトロ・青兵衛

「がっ!!」

フレア

「メトロ!!」

雷薙

「青兵衛!!」

松葉

「大地の力!!」

松葉の大地を揺らす一撃が、フレアと雷薙を直撃した。

ゴズン!!

フレア・雷薙

「キヤアアア!!」

松葉の攻撃・・・

炸裂!!

第4章・5：ライカとハヤテ！雷と風の兄弟対決！！

フレア・雷薙

「ん……」

メトロ・青兵衛

「ここは……どこだ？」

鈴也

「あ、青兵衛達が目を覚ましたよ！松……葉！？」

振り返った鈴也の目に映ったのは、手を組んで怒りのオーラを出している松葉の姿だった。

松葉

「青兵衛〜、メトロ〜……雷薙〜、フレア〜？」

ゴゴゴゴゴ……

フレア

「ま、松葉ちゃん……」

青兵衛

「迷惑かけたな……」

松葉

「迷惑かけたなとちゃうやろ？アンタら昨日補習やったのにサボったんやで？理由はどうあれ、アンタらが来なくてアタシと鈴也が先生にどれだけ怒られたかわかってるん〜？」

青兵衛

「ヤ、ヤバい……」

メトロ

「松葉の目が笑ってねえ……!!」

フレア

「お、お願い松葉ちゃん……」

雷雉

「機嫌直してえ……」

松葉

「アカン、許さへん。お仕置きの間やね、鈴也」

鈴也

「異議なし……」

雷雉・フレア・青兵衛・メトロ

「う、うわあああ……!!」

それから1時間、フレア達は松葉と鈴也に怒られたという……

同じ頃、ライカ・結・シトラスの3人はハヤテ・咲夜・千桜の3人と戦っていた。

ドッ!!

結

「シトラスさんが一撃で・・・何て強さなんですか・・・」

ライカ

「チツ、コイツらかなり力つけてやがるな・・・三千院妹、春風と愛沢の相手頼めるか？」

結

「はい、何とか・・・」

ライカ

「頼んだぞ!!」

結

「咲夜さんも千桜さんも、オイタが過ぎるといけませんよ。弱点帳にたくさん書いてありますからね」

咲夜・千桜

「・・・」

結

「あ、あら？もしかして私、怒らせちゃいました・・・？」

千桜

「三千院結・・・」

咲夜

「ブツ飛ばす!!」

咲夜と千桜は、魔獣の指輪で変身した。

ドゴオ!!

結

「キヤ〜ツ!!」

ハヤテ

「久しぶりだな・・・ライカ兄貴と兄弟ゲンカするのは・・・」

ライカ

「果たしてハヤテが勝てるのかな？オマエ、オレに勝った試しなかつただろ？」

ハヤテ

「バ〜カ、あれは勝たせてやってたのさ。まあ、今度は・・・勝たせてやらないけどね。」

ライカ

「迅雷の如く・・・」

ハヤテ

「疾風の如く・・・」

ライカ

「瞬雷!!」

ハヤテ

「瞬風！！」

ライカとハヤテは、瞬間移動でぶつかり合った。

ドゴォ！！

ライカとハヤテ・・・

兄弟対決、勃発！！

第5章 - 1 : 咲夜と千桜を救え！光の乙女・結！！

ライカ

「瞬雷！！」

ハヤテ

「瞬風！！」

ライカとハヤテは激突した。

ドゴォ！！

ライカ

「また強くなったな、ハヤテ！」

ハヤテ

「兄さんもね！」

ライカ

「雷圧砲！！」

ライカは両手をかざし、雷の砲弾を発射する。

ドン！！

ハヤテ

「甘い！！ウィンド・ウォール！！」

ズアッ！！

ドゴォ！！

ハヤテ

「風圧砲！！」

ハヤテは風の盾でライカの攻撃を防ぐと、続け様に風の砲弾を発射した。

ドン！！

ライカ

「クツ！サンダー・・・」

ハヤテ

「させん！ウインドスピア！！」

ハヤテは風の矢でライカを攻撃する。

バシユ！！

ライカ

「ガツ！！」

盾を出し損ねたライカは、まともに攻撃を喰らった。

ドゴォ！！

ライカ

「ぐあつ！！！！」

結

「ライカさん!!」

ライカ

「オレに構うな!オマエはそつちを倒せ!!」

結

「は、はい!ガズン・ナデイス!!」

結は光弾を連射する。

ドドドドドド!!

咲夜・千桜

「キャッ!!」

咲夜

「このままやと面倒や。一気に片づけんで。」

千桜

「はい!」

咲夜と千桜は結に突っ込む。

ダッ!

結

「2人の目、この私が覚まさせます!!!ハアアアアア……シゴン・ナデイス・ミオウ・ディオウ!!!」

結の体を光が包み込み、金色のネコに変身した。

結

「行きますよ!!」

咲夜と千桜も変身し、ぶつかり合う。

ドゴォ!!

結

「終わらせます!ディオガ・アブソリュート・ジオナデイス!!!」

結は両手をかざし、光の光線を放った。

パアアアア...

咲夜・千桜

「キヤアアアア!!」

咲夜と千桜は気絶した。

ドサッ!

結

「咲夜さんと千桜さんは倒しました!ライカさんも早く!!」

ライカ

「ああ!任せろ!!」

ハヤテ

「永久に燃えよ、不死業火鳥<sup>フエニキア</sup>。」

ハヤテは巨大な不死鳥に変身した。

ハヤテ

「来い、アニキ。」

ライカ

「そっちがそれで来るなら・・・オレも奥の手を使うか。」

ライカはポケットから指輪を取り出した。

スッ！

結

「ライカさんも・・・魔獣の指輪を!？」

ライカ

「覇空を穿て・・・」

ライカは弟を救えるのか!？

次回、兄弟対決に終止符!!

## 第5章・2：ライカとハヤテ！涙の兄弟愛！！

ライカ

「テイアマト覇空を穿て……龍牙雷帝神！！」

ライカは巨大化し、ドラゴンのような姿になった。

ドラゴンの頭部にはライカの上半身が出ている。

結

「あれが、ライカさんの能力解放……」

ライカ

「ああ、これがオレの魔獣『テイアマト』だ。コイツは容姿はカワイイがとんだじゃじゃ馬娘でな……慣れるまでオレも随分かかったもんさ。だが、これで充分ハヤテと戦える！！」

ハヤテ

「フツ、ドラゴンと不死鳥との対決だからドラゴンの方が勝っているとも思っているのか……拍子抜けだな、アニキ！フェザー・ウインドソード……」

ハヤテは翼をはためかせ、羽根を剣状にして放った。

ドドドドドド……！！

ライカ

「クツ、羽根を剣状にして放つとは……腕上げたな、ハヤテよ！！」

ハヤテ

「当然だ。オレは自分の弱さを恥じ、修業してここまで強くなったんだ。それもこれも、ヤツらと戦うため……」

ライカ

「まさか、オマエ……オレが戦っていた勢力の事を言っているのか!？」

ハヤテ

「それ以外に何かがある!!オレはヤツらに勝てる力を身につけた!なのにアニキはオレを連れて行かなかった!なぜだ!!」

ライカ

「それは……」

ハヤテ

「言いたくなければ、それで良い……無理にでもわからせてやる……真・轟颯・白銀疾風怒涛!!!」

ハヤテは強力な風を身にまとった。

ゴオオオオオ……

結

「ヤ、ヤバいです……あんなのをまともに喰らったら、いくらライカさんといえど……」

ライカ

「ハヤテ、それがオマエの全力か……ならば、オレもわからせよ

う・・・オレがオマエを連れて行かなかったワケを・・・」

ライカはそう言うと、雷を体にまとわせた。

バリバリバリ・・・

結

「ラ、ライカさんの体に雷が!？」

ライカ

「真・轟雷・黄金迅雷怒涛・・・」

ハヤテ

「ライカーッ!!!」

ライカ

「ハヤテッ!!!」

ハヤテとライカは、真っ正面から激突した。

ドゴオオオオオ!!!

雷と風の激突が、凄まじい煙を巻き起こす。

ゴオオオオオ!!!

結

「キヤアアアア!!!」

煙が晴れると、そこにはお互いボロボロのハヤテとライカが立って

いた。

シュウウウ・・・

ハヤテ

「クツ・・・」

ライカ

「ハヤテ、オレ達綾崎家が身につける『シン』は、例え会得しても完全に使いこなせるまで数年はかかる・・・オマエにはまだ、この術は早すぎる・・・」

ハヤテ

「・・・ボクは、アーさんと決別してしまったあの日から、ずっと鍛錬に勤しんできました・・・少しでも、兄さんに近づきたかったから・・・兄さんの役に、立ちたかったのに・・・どうして・・・どうしてボクを・・・連れて行ってくれなかったんですか・・・ライカ兄さん・・・」

ハヤテは涙を流した。

ライカ

「オマエは昔から、戦闘とは無縁の生活をしていた・・・たった一人の愛しい弟であるオマエを、危険な目には遭わせたくなかったんだ・・・ハヤテ・・・こんな不甲斐ない兄を、許してくれ・・・」

ライカも涙を流す。

結はその光景を、瞳を潤ませながら見つめていた・・・

ハヤテとライカ、涙の和解！

次回、新たな敵動く！！

第5章・3：マリアとナギ！戦うメイドとお嬢様！！

マリアとナギの2人は、サキ・愛歌・ソニアの3人と戦っていた。

愛歌

「舞い歌え、清廉愛人魚！！」  
セイレーン

ソニア

「轟き打て、魔雷電槌猿！！」  
ミョルニル

サキ

「惑わせ、旋風如来神！！」  
シルフィド

愛歌達は変身した。

ナギ

「3人共変身した！？」

マリア

「ライカ君の情報通りですわ。油断せず行きますわよ、ナギ！」

ナギ

「ああ！」

マリア

「ホウキ変形！薙刀箒！！」

ジャキ！！

マリアはホウキを薙刀に変え、サキ達に突っ込んだ。

ドン！！

サキ

「風神砲！！」

サキは片腕を砲台に変え、風圧の弾丸を放った。

ドン！！

マリア

「甘いすわよ！」

マリアは薙刀を振るい、弾丸を跳ね返した。

ガキーン！！

ソニア

「破壊の鉄槌！！」

ソニアはトンファーを振り、弾丸を破壊した。

バキン！！

マリア

「なかなかやりますわね！」

ナギ

「Gペンラッシュ！！」

ナギはGペン型ミサイルを複数発放った。

シュバババババ！！

愛歌

「リバースクレイドル！！」

愛歌は心地良い歌声で、Gペンミサイルをナギの方に跳ね返した。

クルツ！

ナギ

「甘い！Gペンバリア！！」

ナギはGペンミサイルを固め、バリア状にした。

ガガガガガ！！

愛歌

「！？」

愛歌は怯む。

ナギ

「今だ！反動俊足！！」

ナギはクツに取り付けた小型Gペン型ミサイルを爆発させ、愛歌に突っ込んだ。

ドンー!!

愛歌

「は、速……」

ナギ

「至近距離から撃たれれば、跳ね返すヒマもないだろう？Gペンラ  
ツシュ!!」

ナギは至近距離から愛歌にGペンラツシュを放つ。

ドガガガガ!!

愛歌

「キャアアア!!」

愛歌は吹っ飛ばされ、気絶した。

ナギ

「次はソニアだ!!秘技……ツインテール・スピン!!」

ナギはトレードマークのツインテールごと体を高速で回転させ、ソ  
ニアに突っ込んだ。

ギュルルル……

ドンー!!

ソニア

「わわわっ……」

ナギ

「おりゃあああ!!」

ナギはソニアに激突する。

ドゴォ!!

ソニア

「キヤアアア!!」

ソニアも吹っ飛ばされ、気絶した。

ナギ

「愛歌さんとソニアは倒したぞ、マリア!」

マリア

「ええ、後はサキさんだけ・・・」

サキ

「ギガム・ジキルガ!!」

サキは風の波動を放つ。

ゴォツ!!

マリア

「ハアツ!!」

マリアはハウキを高速回転させ、波動を防ぐ。

ガキーン！！

マリア

「このままでは埒があきませんね。仕方ありません・・・ライカ君からもらった、これを使いますが・・・」

マリアは懐から指輪を取り出した。

スッ！

マリア

「癒せ・・・」

マリアがライカからもらった力は、勝利の鍵となるのか！？

次回、メイド対決に決着！！

第5章・4：マリア、慈しみの抱擁！！

マリア

「ライカ君からもらった力を使います。癒せ・・・」

サキ

「させません！リオル・ジキルガ！！」

サキは両手から螺旋状の風を放った。

ヒュドツ！！

マリア

「こ、これでは力が使えません！」

ナギ

「仕方がない！私も姫神にもらったこれを使っぞ！」

ナギはポケットから指輪を取り出す。

ナギ

「射抜け・・・射弓撃道女！！」  
サジタリス

ドン！！

ナギは指輪の力を解放し、射手座を模した姿に変身した。

ナギ

「Gペンアロー！！」

ナギは弓矢を放つ。

ドシュツッ!!

サキ

「キヤッ!!」

ナギ

「今の内だ、マリア!!」

マリア

「恩に切ります、ナギ・・・癒せ・・・ジオマリア女光神聖母!!」

マリアは指輪の力を解放し、巨大な聖母の姿になった。

ズオオオオオ・・・

サキ

「お、大きい・・・」

ナギ

「そして・・・何て神々しいんだ・・・」

サキ

「これは、サツサと倒した方が良さそうですね・・・ゴウ・ジキルガ!!」

サキは強力な風の光線を放つ。

ゴオツ！！

マリア

「イージス・バリア！！」

マリアは回転する盾で攻撃を防いだ。

バチィ！

サキ

「なっ！？」

マリア

「もう終わりですか？」

サキ

「くっ・・・まだまだあ！ディオ・ジキルガ！！」

サキはさつきよりも数段大きな風の光線を放った。

ゴオツ！！

マリア

「ハアツ！！」

マリアは聖母の盾でまたも攻撃を防ぐ。

バチィン！

サキ

「クソッ！こうなれば、真の呪文で勝負です！シミン・サキユラオ  
ウ・ディオジキルガ！！」

サキは巨大化し、風神のような姿になった。

サキ

「勝負よ、マリアーッ！！」

サキはマリアに突っ込む。

ドンッ！！

マリア

「操られたサキさんの心、今解き放ってあげます・・・真・冬菜・  
慈愛聖母抱擁！！！！」

マリアは変身時よりさらに巨大化し、サキを包み込んだ。

ファサ・・・

サキ

「ああ・・・この抱擁・・・まるでお母さんを思い起こさせてく  
れるみたいです・・・」

パアアアア・・・

煙が晴れると、そこにはマリアとサキがいた。

サキ

「マリアさん・・・ありがとうございます！！」

マリア

「いえいえ、みんな無事で良かったですわ。」

ナギ

「マリアのあの抱擁力・・・見習いたいものだな・・・」

ナギは微笑んでいた。

泉

「マリアちゃん、ナギちゃんと結ちゃん達から連絡だよ！ハヤテ君達やサキさん達、元に戻ったって！」

たくま

「本当か！！」

マリア

「真希ちゃんらからも連絡きとる。だいぶ戦力が戻ってきたなあ。」

「オマエ達、何呑気に喜んでいる？」

たくま

「その声は・・・」

マリア

「風月ちゃんらやな？」

美希

「聞いた感じだと、どうやら次々に洗脳を解いてるようね・・・」

泉

「そだよ！次は美希ちゃん達の番だからね！」

風月

「フツ・・・」

暁

「やれるものなら、やってみろ！！」

戻りつつある絆・・・

次は泉達が戦うよ！！

第5章・5：坂本たくまの新たな力！！

風月

「私達を倒すですって？」

暁

「やれるものなら、やってみる・・・」

風月と暁の背後に、ダークオーラがたった。

ゴゴゴゴゴゴ・・・

マリア

「来るで、たくま！！」

たくま

「わかつてる！！」

暁

「焼き払え、ウルカヌス炎魔踊劇者！！」

風月

「羽ばたけ、ファイリア虹季美妖精！！」

暁は炎をまとったダンサーの姿に、風月は赤青黄緑の翼を生やした妖精の姿に変身した。

ドオン！！

たくま

「来やがったな・・・」

マリア

「たくま、行けるか？」

たくま

「誰に聞いてんだ？」

そう言うと、たくまはポケットから指輪を取り出した。

たくま

「鎮める・・・酒鬼吞門丸！！」

たくまは指輪の力を解放し、鬼のような姿になった。

たくま

「行くぞ、暁！！」

たくまは暁に突っ込んで行く。

マリア

「さて、ウチも行くか。」

風月

「あなたも指輪の力を使うのかしら？」

マリア

「アンタ如きにウチの力使うまでもあらへん・・・アンタなんか、これで充分や！」

そう言うと、マリアは自分にネコ達をまとわせ、人猫化した。

ドオン！！

マリア

「フツシャアアア！！」

風月

「サマザケル・サプライス！！」

風月は雷の波動を放った。

バシュ！！

マリア

「ブレイクスラッシュ！！」

マリアは手に爪を生やし、風月の術を斬り裂いた。

ザンツ！！

風月

「サプライス！！」

ドン！！

マリア

「スラッシュブロック！！」

マリアは爪を振り下ろし、衝撃波で攻撃を防いだ。

ブンー！！

ドゴォー！！

風月

「クッ……」

マリア

「キャットスピード！！」

マリアは瞬間移動で風月に近づく。

ビュンー！！

風月

「こ、来ないで！ウインギコル・スプリイス！！」

風月は呪文でマリアを凍らせる。

ガキン！

しかし、マリアのスピードは止まらない。

風月

「トドメよ！フォルエムル・スプリイス！！」

風月は続いて、炎を呪文を叩き込んだ。

ゴオオ！！

マリア

「フツシャアアア！！」

それでもマリアの暴走は止まらない。

風月

「ウツソオオオ！？」

風月は悲鳴を上げた。

マリア

「ブレイクスラッシュュ！！」

マリアは風月を攻撃する。

風月

「あ……う……」

風月は倒れた。

マリア

「安心し、峰打ちや。」

暁

「やはりマリアちゃんはやるな。それじゃあ、オレもそろそろ本気で行くか。」

たくま

「残念だが、オマエは既に終わった。」

暁

「？」

次の瞬間、暁は片ヒザをつく。

ガクン！

暁

「な・・・何をした・・・」

たくま

「前に美保さんに教わったのさ、一時的に筋肉をマヒさせるツボの事を。オマエを攻撃した時、腕・ヒザのそれぞれ4ヶ所を刺激させてもらった。」

暁

「ぐ・・・」

暁は倒れた。

たくま

「後は任せるぜ、泉さん！」

たくまとマリア、大活躍！

泉と美希の対決の行方は！？

## 第6章 - 1 : 空からの援軍

たくま

「暁君と風月ちゃんは倒した。」

泉

「後は美希ちゃんだけだよ！」

マリア

「覚悟はええか？」

マリア達は美希を取り囲んでいる。

美希

「覚悟？その言葉、そのままあなた達に返してあげるわ……」

美希はスカートのポケットから指輪を取り出した。

スッ！

たくま

「あの人、何かやる気だ！」

マリア

「そうはさせるか！たくま、泉ちゃん！突っ込むで！！」

たくま・泉

「おおっ！！！！」

マリア達3人は美希に突っ込む。

ドンッ!!

美希

「極める、デスマンラ無限夢闘王!!」

カッ!

マリア・泉

「キヤッ!」

たくま

「何だ?」

マリア達は吹っ飛ばされながらも、体制を立て直す。

煙が晴れると、そこにはドレス状の鎧に身を包んだ美希がいた。

たくま

「何だ?あまり姿変わってないぞ?」

泉

「これで本当に指輪の力なの?」

美希

「バカね・・・私のこの能力は、コピーバングルに内蔵された全ての能力を使える技・・・そこらのとは比べ物にならないのよ!バーニングウィング!!」

美希は炎の翼を生やして突っ込んだ。

ドン!!

泉

「潮騒の波動!!」

泉は物干竿を振るい、水の波動を放つ。

ゴオツ!

美希

「効かないわよ。リフレクトフォース!!」

美希は波動を跳ね返し、泉に当てた。

バシユツ!

泉

「キヤアツ!!」

マリア

「泉ちゃん!」

たくま

「炎獄衝!!」

たくまは棍棒を地面に叩きつけ、炎の衝撃波を起こす。

ドン!!

ゴオッ！

美希

「甘い甘い。バブル・キャノン！！」

美希は泡の砲弾を複数発放った。

ドン！！

たくま

「クソッ、何てヤツだ。」

マリア

「みんなで一斉にかかるんや！」

マリア達は美希を囲む。

マリア

「村正・轟波動！！」

泉

「物干竿・潮騒水流波！！」

たくま

「爆砕・炎獄衝！！」

マリア達はそれぞれの技を一斉に放った。

美希

「・・・スマブラ。」

3人の攻撃が美希を直撃する。

ドゴオオオ!!

煙が晴れると、そこにはボロボロの美希が立っていた。

たくま

「ウソだろ・・・」

泉

「まさか、まだ・・・」

マリア

「まだやれる!もう1度3人で・・・」

そう言った瞬間、美希は強力な波動でたくまとマリアを吹っ飛ばした。

たくま

「うわっ!!」

マリア

「キャアツ!!」

泉

「たくま君、マリアちゃん!!」

2人は気絶する。

美希

「次はあなたよ。」

美希はゆっくりと泉に近づいて来た。

ザッザッ・・・

泉

「あ・・・あ・・・」

泉が目を瞑った、その時・・・

「急速麻酔弾！！」

突然飛んで来た針が、美希の後頭部を直撃した。

プスッ！

美希

「う・・・」

美希は倒れる。

ドサッ！

「ダメですよ、油断しては・・・」

声のした方に泉が目をやると、そこには戦艦となった猫夜と、彼女に乗ってきたウォッカの姿があった。

## 第6章・2：麗しきネコ娘

泉

「猫夜さんとウォツカさん！来てくれたんですか？」

猫夜

「ええ、犬美から話は聞いていたので。それに、あなた達を守れとも言われましたのでね。」

泉

「え？それってどういう・・・」

泉が聞こうとした瞬間、泉達は4人の男女に取り囲まれた。

ザッ！

泉

「鬨樹さん、躑躅さん、鉄泉さん、政宗さん！？」

猫夜

「犬美の情報は正しかったようです。行きますよ、泉さん！！」

泉

「は、はい！！」

躑躅

「絞め殺せ、磯海ユリイドル百合獣。」

鬨樹



躑躅は触手で砲弾を絡め取り、エネルギーを吸収した。

ギューイイイ……

猫夜

「フム。なかなかですね。ですがそれは私が1発1発を複数方向に放っていたからできる事。全ての砲弾を1ヶ所に何1000発も撃ち込めば返せないでしょう。無限風砲弾!!!」  
アンフィニテス・ウインディウムカノン

猫夜は右手の砲台から1000発以上もの弾丸を発射した。

ドドドドドド!!!

鬨樹

「法力の盾!!!」

鬨樹は回転する数珠の盾で猫夜の攻撃を防ごうとしたが、防ぎきれず吹き飛ばされた。

ドゴオ!!!

鬨樹

「ぐあっ!!!」

躑躅

「鬨樹!!!」

猫夜

「余所見はいけませんよ?ガンジャス・ウイルド!!!」

猫夜は地面を連続で叩き、地面から風のムチを乱射する。

ズドドドドド!!

躑躅

「キヤアアア!!」

躑躅も吹き飛ばされた。

猫夜

「これで2人ですよ？」

鉄泉

「甘いいう。ワシは1人でもお主らを倒す自信があるぞ。拡散雷撃波!!」

鉄泉は周囲に雷撃を飛ばす。

バババババ!!

「羽衣の盾!!」

飛んできた雷撃を、突然現れた犬美が防いだ。

バチィ!!

猫夜

「犬美!!」

猿山

「オレもいるぞ。」

ウオツカ

「猿山も来たか・・・」

犬美

「さて・・・ゆるりと倒していっしょかしらね。」

## 第6章 - 3 : 変わり果てた先生

犬美

「さて・・・ゆるりと倒していこうかしらね。」

政宗

「オマエらが私を倒すだと？思い上がるなよ。悪魔だった頃ならまだわかるが、今のオマエらはただの人間だ。人間が指輪の力を解放した私にかなうと思うのか？そもそも私の能力は怒りを糧にする力・  
・仲間が倒れば倒れるほど、私の姿は巨大化する！！」

ズオオオ！！

政宗は巨大化する。

犬美

「バカね。人間になったとて、アタシ達の力はさほど変わらないのよ？燃え盛れ、灼熱業火犬女神。」  
アラビアンサラマンデー

犬美は戦闘形態になった。

猿山

「オマエが使うなら、オレも出すか。撃ち狂え、  
ユニコリエイブドタ一角猿獣金重砲戦車。」

ドン！！

猿山は指輪の力を解放し、戦車の鎧をまとった姿になった。

犬美

「猿山も随分姿が変わったわね。」

猿山

「ああ、以前は下半身が戦車になったりしたもんだが・・・これは両肩・両腕・体・両足にそれぞれ戦車のパーツがついたからな。弱体化はしたが、それでもオレは平気だ！ユニコーンカノン！！」

猿山は胴体の砲台から弾丸を発射する。

ドン！！

政宗

「気合い・・・パンチ！！」

政宗は拳で弾丸を粉碎した。

ドゴオ！！

政宗

「どつだ。」

猿山

「残念だったな。これでオマエは逃げられないぜ？」

政宗

「何？」

猿山

「オレの弾丸がただの弾丸だとも思ったのか？オレの弾は粉碎さ

れると、破片が細かい弾丸になるんだよ。」

政宗

「な、何い!？」

猿山

「よく確かめもせず攻撃した事を後悔するんだな……やれえ!!」

細かくなった弾丸は、一斉に政宗を直撃する。

ズドドドド!!

煙が晴れると、政宗が気絶した状態で現れた。

猿山

「ま、こんなもんだ。」

時津潤治

「先生、一体どうしたんだ!？」

越水七槻

「目を覚ましてったい!三棱さん、凧先生、明日奈さん!!」

向日木凧

「空をなぎ払え、鉄火風鎧鳥。」

流音三稜

「魅了せよ、潤美水羽鰻。」

不炎明日奈

「焼き殺せ、炎獄岩蝸牛。」

凧達は変身した。

潤治

「何でだ……」

七槻

「どうしてボク達の声が届かんったい!?!」

「恐らく、洗脳を受けているからだ。」

潤治・七槻

「え?」

焔と我暖が、空中から降りて来た。

タンッ!

潤治

「あ、我暖大先生!?!」

七槻

「ほ、焔さん!?!」

焔

「よう、久しぶり。」

流音我暖

「ゆっくり会話してるヒマはなさそうですね。」

焰

「みただな。煙に巻け、セキタール石炭坑火亀!!」

我暖

「麗せ、クインドラ水竜巻風竜!!」

焰と我暖は変身した。

## 第6章 - 4 : ジンダイと風蘭の戦い

焰と我暖が力を解放して戦い始めてから数10分後、戦いの決着はアツサリついた。

焰は最強の煙使い。

そんな彼と、前鹿児島担当だった我暖が組めば鬼に金棒も同然だった。

焰

「案外早く片づいたな。」

我暖

「ええ・・・む？」

我暖の携帯が鳴る。

我暖

「はい、我暖・・・そうですね。潤治君、七槻君。すぐに長野県に向かっていたみたいです。」

潤治

「長野・・・ですか？」

我暖

「ウム。大和警部と上原警部補が、山村警部・如月警部補と戦闘になったらしい。援護に来て欲しいようだ。」

七槻

「長野だったら飛んで行けばすぐいたい！行くよ、潤治！」

潤治

「ああ！」

七槻と潤治はトロピノドンに乗って飛んで行った。

同じ頃、ジンダイは1人リラ達から離れ、風蘭と戦闘になっていた。

ジンダイ

「風蘭、元気そうで何よりだ。だがオマエが今やっている事は間違っている。わかるか？」

砥草根風蘭

「・・・身を纏え、メタモール変化在液獣。」

風蘭は指輪を発動し、スライムのような鎧を身に纏った姿になった。

ジンダイ

「話を聞かないか。ならば腕ずくで目を覚まさせてやろう。来い！  
！」

風蘭

「ドンカラス。」

風蘭はテンガロンハットをかぶり、両手を翼に変えた姿になった。

風蘭

「闇の波動!!」

風蘭は自らの周囲に闇の波動を放つ。

ズアッ!

ジンダイ

「そうくるか、ならば! ガーディアン・レジセクト!」

レジセクトは糸を発射し、風蘭を絡め取る。

シュルルル!

風蘭

「キャッ! ブーバーン・オーバーヒート!!」

風蘭は炎を身に纏った姿になり、糸を焼き切った。

ポッ!

風蘭

「火炎放射!!」

風蘭は両手の砲台から火炎放射を放つ。

ゴオオオオオ!!

ジンダイ

「まったく、少しは頭を冷やせ・・・レジバブル！ハイドロカノン！」

ジンダイはガーディアンから放つ水流で攻撃を消火する。

バシユ！！

水流はそのまま、風蘭を吹っ飛ばした。

シュバ！！

風蘭

「キヤアアア！！」

風蘭は壁に激突する。

ドゴオ！！

風蘭

「う・・・ジンダイ？」

ジンダイ

「その目・・・どうやら正気に戻ったようだな。」

風蘭

「ジンダイ、大変よ！ワタル君がリラ達6人を襲撃しに行ったわ！」

ジンダイ

「ワタル君は1人だろう？いくらディティクティブマスターの部下とはいえ、1人じゃ6人を相手にするのはキツいんじゃないか？」

風蘭

「ジンダイは何もわかってない！ワタル君の指輪の能力の恐ろしさを！！」

ジンダイ

「能力の恐ろしさ？」

風蘭

「ワタル君の指輪は『ドクロボス骸骨増兵樹』。その能力は、骨の兵隊を無限に生み出すもの！！」

ジンダイ

「そんな能力なのか。リラ達が心配だな・・・」

第6章 - 5 : 思わぬ援軍！ハートネス家勢揃い！！

リラ達はワタル・瑛祐・琴美と戦っていた。

ヒース

「クソツ……」

コゴミ

「そんな……純一さんが一瞬にしてやられるなんて……」

アザミ

「オマケにヤツら、指輪を解放してもないのに……」

琴美

「こんなものか。こんなものがFBIの力か……こんなヤツらに、深雪達はやられたのか……終わらせる。砕き討て、ハンマード可憐妖妃鮫。」

177

瑛祐

「話にならない。オマエらオレ達を一步退かせる事もできないか。つまらん……破碎せよ、大轟魔タイラント大帝。」

瑛祐と琴美は戦闘形態になった。

ダツラ

「く……終わりだ……」

リラ達が敗北を悟った、その時……

「やっと追いついたぜ。」

ウコン

「この声は……」

ユーリ

「久しぶりだな、元同志。」

ユーリ達ハートネス家の面々がそこにいた。

ユーリ・ジョディ・岩蔵・レイン・リリー・リアン・アスカ・サスケの8人だ。

リラ

「パパ!? ママも!」

ユーリ

「よお。」

リアン

「……」

リアンは俊足で、気絶中の純一に近づく。

ザッ!

リアン

「いつまで寝たフリしてんねん!」

リアンは純一を蹴飛ばした。

ドカツ！

純一

「イタッ！リアン・・・少し見ない間にキレイになったな・・・」

リアン

「・・・」

リアンは木刀で純一を叩く。

ゴッ！

純一

「痛い！！」

リアン

「ここで見とき！アタシがこの数ヶ月でどんだけ強うなったか見したるわ！！」

純一

「リアン・・・元気そうで何よりだ。」

リアン

「・・・アホ！」

リアンはユーリ達の元に戻った。

ユーリ

「戻ったか。」

リアン

「ホンマはもう少し話したかったんやけど……そろそろ向こうも痺れ切らす頃やろ。」

ワタル

「……這い上がれ、ドクロボス觸體増兵樹。」

ワタルは指輪の力を解放し、樹と一体化したような姿となった。

そして、樹の枝から次々に骨の兵士を生み出していく。

ドザザザザザザザザ！！

ダツラ

「まさか……」

ヒース

「あれが全部兵隊か……！！」

ユーリ

「行くぜ、オマエら。」

ユーリの声と同時に、8人は全員仮面を出現させ装着した。

ドン！！

説明しよう。

ハートネス家の者及びその家に婿または嫁に入った者は、一定の年齢に達した時特殊な能力に目覚め、仮面を自由に脱着できるように

なるのだ。

ユーリは×印型の鉄仮面。

ジョディはクモを模した仮面。

リリーは氷の結晶を模した仮面。

リアンは左右対称になった稲妻の仮面。

アスカは水の漢字を模した仮面。

サスケは開いた葉っぱを模した仮面。

岩蔵は口元と後頭部にドリルがついた仮面。

レインは雨の漢字を模した仮面だ。

ユーリの指示で、ジョディ達は兵隊達に向かって行った。

次回、敵を討つ!!

第7章 - 1 : 東都タワーへの潜入、内なる裏切り者!?

ユーリの指示で、リリー達はワタルが出現させた兵隊達に向かって行った。

ドン!!

リリー

「オリヤアアアア!!」

リリーは手刀で兵隊の1人を斬り裂く。

ズバアアアア!!

リリー

「冷却光線!!」

リリーは口から冷気の光線を放った。

ゴヒュオオオ!!

岩蔵

「オオオ・・・ラララララララア!!」

ドガガガガ!!

岩蔵は連続の拳で兵隊を破壊していく。

『119・・・』

背後から迫る兵隊も、岩蔵はヒジのドリルで貫いた。

ドス！！

アスカ

「アスカキークク！！えいつ！！」

ドゴォ！！

アスカは蹴り技で次々に兵隊を破壊していく。

アスカ

「キック、キック、キーク！！」

バキッ、ドカッ！

サスケ

「みんなハシヤギすぎだ。祭りじゃないんだぞ？静かにしろ。」

サスケは念を込めた手を合わせ、出現したムチで兵隊達の首を次々に斬り取った。

スパスパスパ！

その首を、リアンが雷を込めた木刀で斬り裂いていく。

ズバツ！！

リアン

「邪魔や。デカイもんをゴロゴロ転がすんやないわ。」

リアンを兵隊達に取り囲む。

リアン

「ラージア・リスス!!」

リアンは拡散する雷撃で兵隊達を破壊した。

バリバリ!

バキヤツ!

ジヨデイ

「来るのよ。そう、来なさい・・・そのまま近づいて、あなたは・・・私の糸の虜になる。」

ジヨデイが出した糸に、兵隊は絡まっている。

ジヨデイ

「発火糸!!」

ジヨデイが糸に触れると、兵隊が一瞬にして燃えた。

ポッ!!

レイン

「ハアアアア!!」

レインは女らしからぬ腕力で、兵隊を引き裂いていく。

バリー！！

ヒース

「すごい・・・メチャクチャだ・・・メチャクチャ強い！！」

ウコン

「さすがはリラの家族じゃな・・・」

ヒース達は、ユトリ達の強さに感心していた。

ユトリ

「フウ。リアン！」

リアン

「何や、ユトリ兄？」

ユトリ

「新一君と志保君が東都タワーに向かっているらしい。遊びに行っただろうが、何かと心配だ。結君やデュリオア達に連絡したから、彼らと合流して2人の尾行をしてくれ。」

リアン

「了解！」

リアンは東都タワーに向かって走り出した。

リアンが東都タワーに着くと、デュリオア・ヒナギク・結・アテネ・花鳥・琴葉・愛子の7人がリアンを待っていた。

デュリオア

「やっと来たか、待ちくたびれたよ。」

リアン

「美保とエルは？」

ヒナギク

「何か手がかりを掴んだってユリちゃんが言うんで、彼女達に呼ばれて行きましたよ。」

リアン

「『彼女達』って事は、他にも一緒におる子がいるんやな。」

琴葉

「2人を狙っているヤツらがここに来る可能性があるわ。今から突入するわよ!!」

リアン・アテネ・ヒナギク・結・デュリオア・花鳥

「はい!!」

リアン達は琴葉と愛子に連れられ、東都タワーへと入って行った。

結

「な、何を・・・」

ゴオツ！！

ドカツ！！

結

「キャア！！」

ドサツ！

デュリオア・ヒナギク・アテネ・リアン・花鳥、そして結。

倒れ込んだ6人を、あの2人が不敵な笑みを浮かべて見下ろしていた・・・

「フフフ・・・」

## 第7章・2：スリ替わっていた本部長と刑事部長

阿笠邸で涼んでいたユリの元に、元太が訪れていた。

ユリ

「話って何、元太？」

元太

「こないだ潮干狩りに行つたる？その時結さんが拾ったこの紙飛行機がどうも気になってるんだ。」

ユリ

「見たトコ普通の紙飛行機だけど・・・」

元太

「オレが気になってるのは、紙飛行機に書かれた暗号だよ。」

ユリ

「暗号？」

元太

「ああ。『N L F』って書かれてるだろ？これ、カタカナに直して読んでみると言葉にならないか？」

ユリ

「ホントだわ。へ・・・ル・・・プ・・・ヘルプ!？」

元太

「きつと浜辺の近くに、助けを求めている人がいたんだ。ユリ、今か

ら出かけるぜ！」

ユリ

「ええ！」

ユリは書き置きをし、元太と共に出かけた。

元太

「ここが前に来た浜辺だ……」

ユリ

「そついえば有希さんが、この近くに貸切にしている別荘があるって言うってたよね……ん？また紙飛行機だわ！」

ユリは紙飛行機を拾い上げる。

元太

「同じ暗号みたいだ……とにかく、誰かを呼ぼう！」

ユリ

「ええ！」

ユリは美保とエルに電話をかけた。

1時間程して、美保とエルがやって来た。

美保

「この近くに、助けを求めている人がいるのね？」

ユリ

「ええ、間違いないわ！ただ、紙飛行機に暗号書いてたのが気になるの。」

美保

「紙飛行機に……まさか！？」

エル

「ユリちゃんと元太君は、覆面パトカーの中で待っていて。」

美保とエルはユリと元太をパトカーに残すと、探索を始めた。

同時刻、東都タワー

コナンと哀は、東都タワーの展望台下のバーに来ていた。

哀

「ここからの眺めは最高ね。」

コナン

「ああ、デートには相応しい場所だろうな。」

哀

「ヤダ、新一君つたら・・・」

コナン

「だけど、ここに相応しくないヤツらも来てるみたいだぜ。」

哀

「え・・・？」

コナン

「そこにいるんだろ？出て来なよ・・・京都府警本部長・白野琴葉さん・・・京都府警刑事部長・瀬藤愛子さん・・・イヤ・・・アキラビットと久遠木ミカゲさんって言った方が良いのかな？」

哀

「え！！アキラビットとミカゲさん！？」

アキラビット

「ウフフ・・・」

ミカゲ

「・・・」

エル

「ここなの、美保？」

美保

「ええ、紙飛行機が落ちてるわ・・・」

美保とエルは拳銃を持つと、別荘の中に突入した。

ドカツ！！

美保

「警察よ！動かないで・・・」

琴葉・愛子

「んゝ、んゝ・・・」

美保はその光景を見て絶句する。

そこにいたのは、手足と体をロープでグルグル巻きに縛られ口をガムテープで塞がれた白野琴葉と瀬藤愛子だったからだ。

美保

「お母さん、愛子さん！！」

エル

「琴葉さんに愛子さん！！これってどういう事！？」

美保は琴葉と愛子の口に貼られたガムテープをはがしながら答える。

ビリ・・・

美保

「あのお母さんと愛子さんは偽者、すり替わっていたんだわ！！お母さんと愛子さんは、紙飛行機を飛ばすのが好きだった。まさかと

は思っていたけど・・・ボスに連絡して!」

### 第7章 - 3 : アクアビット、登場

ブオオオオオオ・・・

プルル・・・

ピッ！

カシャツサ

「オレだ・・・どうした？」

メスカル

「バレたわよ・・・アクアビットとミカゲが彼女達とすり替わって  
いたって・・・」

カシャツサ

「そうか・・・」

メスカルはバイクを発車させる。

バルルルル・・・

それをユリと元太が目撃した。

ユリ

「あれは・・・メスカル！！」

元太

「変装が得意っていう、組織の残党の1人か！！」

ユリ

「ええ・・・コナン君達が心配だわ・・・」

哀

「白野本部長達はどうしたの？まさか・・・」

アクアビット

「イヤ、まだ生きてるわよ・・・アタシ達の身代わりに犯人役をやつてもらわなきゃならないからね・・・」

ゴソ！

コナン

「それが例のメモリーカードか？」

アクアビット

「まあね・・・アタシ達が偽者だといつ気づいたの？」

コナン

「哀がここに来る前に気づいたんだ。琴葉さんも愛子さんも、体格が結構しっかりしてる・・・細身のメスカルは彼女達と体格が違いすぎて化けるのは不可能だつてな！」

アクアビット

「なるほど・・・さすがは工藤新一とシェリーね・・・」

コナン・哀

「!?!」

アクアビット

「安心なさい、まだ誰にも話しちゃいないわ……」

哀

「カシヤツサにも？」

アクアビット

「ええ……」

哀

「どうして？」

アクアビット

「ヤツは以前、ミスを犯したメンバーをバラバラに惨殺し、山中に放置した事があったのよ……そのメンバーは、アタシの夫になる予定の人だった……」

哀

「ナポレオンか!?!」

アクアビット

「覚えていたのね……ヤツは組織にあるまじき行いをした……アタシはあなた達を連れ帰り洗脳する……あの冷血野郎を同じ目に遭わすためにね……」

コナン・哀

「・・・」

アクアビット

「安心なさい、あなた達は殺さないわ・・・幼児化した2人の人間・  
・魅力的な存在だもの・・・」

アクアビットはコナンと哀に近づいた・・・

## 第7章・4：イリユウVSミカゲ

コナンと哀に近づくアクアビット。

後1歩と迫ったその時、静止する声が響いた。

「そこまでよ!」

アクアビット

「ん?」

アクアビットが振り返ると、そこにはイズナとイリユウがいた。

哀

「イズナ、イリユウ!」

イリユウ

「探したよ、2人共・・・」

イズナ

「ソイツらね?今回の事件を起こした犯人は・・・」

アクアビット

「チツ、まだいたか・・・」

ミカゲ

「アクアビットさん、あなたの手を煩わせるまでもありません・・・  
ここは、私が。」

アクアビット

「ミカゲ……」

イリユウ

「ならば、ここはオレが引き受ける。聞いた話じゃ、元々天王らしいな。」

ミカゲ

「わかってるなら、私を甘く見ない方が良いでしょう？」

イリユウ

「安心しろ……オレも端からそのつもり……だ!!」

ミカゲとイリユウは、向かい合った。

ミカゲ

「ハアッ!!」

ミカゲは突っ込み、回し蹴りを繰り返す。

ブンッ!

イリユウ

「クッ!」

ミカゲ

「私は今術が使えないんですよ。でも私は肉弾戦でも充分戦えます!」

ミカゲは連続の拳でイリユウを攻撃する。

ドドドドドド!!

イリュウ

「人間でこれほどの護身術が使えるとはな・・・正直驚いた。」

ミカゲ

「ならそろそろ降参してください!!」

ミカゲはイリュウに突っ込む。

ミカゲ

「ハアツ!!」

ミカゲはイリュウにかかと落としをした。

ゴツ!!

だが、そこにイリュウはいなかった。

ミカゲ

「な!？」

ミカゲが振り返ると、イリュウは背後にいた。

イリュウ

「悪いな・・・オレは強い女は好きな方だが、あまりじゃじゃ馬なものかどうかと思っぜ?」

イリュウは一本背負いでミカゲを投げ飛ばした。

ブンッ!

ミカゲ

「キヤアアア!!」

ミカゲは床に叩きつけられ、気絶する。

イリユウ

「じゃじゃ馬なのは、イズナだけで充分だ……」

イズナ

「ちよっ、誰がじゃじゃ馬よ!!」

イリユウ

「とにかくこれで、ミカゲの洗脳は解けた……今頃ディティクテ  
イブマスター達も、正気に戻っているだろうよ……」

ミサオ

「う……オレは今まで何をした……?」

大和勘助

「山村! 正気に戻ったのか?」

ミサオ

「ええまあ……まだ頭が痛みますけどね……」

上原由衣

「無理ないわ・・・2人共洗脳されていたんだもの・・・」

羽鳥

「アタシ達が洗脳？道理で記憶が薄いワケね・・・」

勘助

「急ぐぞ。あのメガネの小僧共が心配だ・・・」

## 第7章 - 5 : イズナVSアクアビット

アクアビット

「ミカゲを倒すとは・・・なかなかの武道派ね。」

イズナ

「イリュウ・・・さすがね。後で説教だけどね。」

イリュウ

「マジかよ・・・」

イズナ

「さあ、第2ラウンドの開始よ!!」

イズナはアクアビットの腹部に鉄拳を打ち込んだ。

ゴッ!!

アクアビット

「そういえばカシヤツサから聞いてたわ・・・あなたは相当の武道派女だと・・・ね!!」

アクアビットは蹴りでイズナを吹っ飛ばす。

イズナ

「うつ・・・」

アクアビット

「フフフ・・・」

イズナ

「ハアツ!!」

イズナは足払いをする。

ブンツ!

アクアビット

「アダツ!!フン・・・」

イズナとアクアビットの交戦が続く。

アクアビット

「ハツ!せいっ!!」

イズナ

「えいつ!やあっ!!」

イズナはアクアビットを圧倒する。

イズナ

「ハアツ!!」

イズナは強烈な回し蹴りをアクアビットに喰らわす。

バキイツ!!

アクアビット

「クツ・・・」

イズナ  
「!!!」

イズナはアクアビットの顔を見て絶句する。

アクアビットのかぶっていた変装のマスクが、下部分だけ破れていた。

アクアビット

「アーツハツハツハツ!!!」

イズナ

「ヒツ・・・」

イズナは怯む。

アクアビット

「ハツ!!!」

アクアビットはその隙をつき、イズナに攻撃を叩き込んでいく。

ゴッ!

ドカッ!

アクアビット

「ハアッ!!!」

アクアビットは回し蹴りをイズナに叩き込む。

バキィッ!!

イズナ

「キヤアッ!!」

イズナは吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられた。

ドカッ!

イズナ

「うう・・・」

アクアビット

「フン・・・手間かけさせやがって・・・」

アクアビットは手を振りながら、イズナに近づく。

イズナは立ち上がろうとした。

哀

「イズナ立つな!後は私に任せて、あなたはジッとしてなさい!!」

イズナ

「哀・・・ちゃん・・・」

イズナは安心したのか、気を失う。

アクアビット

「チィッ!!」

アクアビットは白野琴葉のマスクを剥ぎ取った。

へり・・・

アクアビットは拳銃を取り出すと、白野琴葉の変装を解く。

バサアッ！！

## 第8章・1：コナン&哀VSアクアビット

哀はイズナの指から1つ指輪を取ると、コナンと共に走り出した。

ダッ！

アクアビット

「さあ逃げなさい！！アタシをもっと楽しませてよ……」

バタン！

アクアビット

「ん……？フッ……」

コナンと哀を追うアクアビットは、近くのドアに目をやった。

アクアビット

「ニヤ……」

ドアの下から光が漏れている。

アクアビットは拳銃を乱射した。

パシユ、パシユ、パシユ！

ドアが開く。

ギィィ……

そこには、腕時計型ライトが置いてあった。

アクアビット

「ハ!？」

アクアビットの死角から、サッカーボールが飛んで来る。

ゴオツ!!

ガツ!

アクアビット

「クツ!!」

コナン・哀

「クソツ!!」

コナンと哀は再びボールを出そうとしたが、それよりアクアビットが射出口を撃ち抜いた。

パシユ!

ギン!

ドサツ!

アクアビット

「惜しい……もう少しだったわねえ……」

アクアビットは続いて、コナンと哀のシューズを撃った。

パシユ！

バキ！

アクアビット

「どうしたの？もう終わり？」

パシユ！

ギン！

コナン・哀

「！！」

コナンと哀は、出口に向かって走り出した。

ダッ！

アクアビット

「よーし、その調子よー！」

コナンと哀は階段を上がって行く。

カンカンカン・・・

ギンギン！

その後からアクアビットが狙う。

アクアビット

「そろそろ追いかけてこも終わりにしましょうっ……」

アクアビットは階段の上に拳銃を向ける。

すると、哀だけが飛び出して来た。

バツ！

アクアビット

「な！！」

哀

「ハアッ！！」

哀はアクアビットに飛び蹴りを喰らわせる。

ドッ！

アクアビット

「キャアッ！！」

アクアビットは床に叩きつけられた。

ゴッ！！

アクアビット

「あうっ！！」

哀は拳銃を拾い、アクアビットに向ける。

ジャキッ!

哀

「形勢逆転ね……」

アクアビット

「クソッ……」

哀

「さあ、メモリーカードを渡してもらおうよ……」

アクアビット

「フン……」

その時、急に東都タワーの電気が消えた。

フッ!

哀

「!?!」

アクアビット

「来たわね……」

哀の目に、ヘリコプターが映った。

バラバラバラバラ……

哀は光に照らされる。

哀

「！！うっ！！」

アクアビット

「フフ・・・」

アクアビットはその隙をつき、哀の首を掴んだ。

ガッ！

哀

「キャッ！！」

ドッ！

アクアビットは哀のこめかみに拳銃を突きつける。

アクアビット

「形勢逆転・・・ね！！」

## 第8章・2：アクアビット、撃たれる

アクアビット

「形勢逆転・・・ね!」

哀

「うっ・・・」

その時、電話が鳴った。

プルル・・・

アクアビット

「あん?」

アクアビットは哀を離し、電話に出る。

コナンはその間に階段を降り、哀に駆け寄った。

ピッ!

アクアビット

「アタシよ・・・」

カシャツサ

「どうだ・・・メモリーカードは手に入れたか?」

アクアビット

「ええ・・・」

アクアビットはメモリーカードをカシャツサに見せる。

モニターから充分見えているカシャツサだが、彼はトボケた。

カシャツサ

「よく見えねえな・・・もっと前に突き出せ。」

アクアビット

「チツ!!」

アクアビットは少し前に出す。

カシャツサ

「そうだ・・・もっと前に・・・」

アクアビットは腕を伸ばし、メモリーカードを目一杯前に突き出した。

カシャツサ

「殺れ!!」

カシャツサの命で、マールはショットガンを撃つ。

ガウン!!

弾丸はメモリーカードごと、アクアビットを撃ち抜いた。

ビツ!!

アクアビット

「うぁっ!!」

コナン・哀

「!!」

アクアビット

「あぁっ!!」

ドウツ!!

マール

「ビンゴ!!」

ミード

「アタシ、撃ちたかった……」

スピリタス

「カシヤツサ……」

カシヤツサ

「下を見てみる……」

スピリタス

「……え？」

スピリタスが下を見ると、パトカーが大量に集まっていた。

スピリタス

「あれは……」

カシャツサ

「ヤツはもう、逃げられねえ……ご苦労だったな……アクアビツト……ん？」

カシャツサはモニターを見る。

すると、コナンと哀の足がはみ出していた。

カシャツサ

「もう2人いる……」

コナン

「おい、しっかりしろ!! 起きろ、おい!!」

哀

「大丈夫、急所は外れてるわ! ヤツらを片づけて、すぐに手当てすれば……」

コナンと哀は両側からアクアビツトを肩に担ぐ。

アクアビツト

「なるほど……ね……」

コナン・哀

「!?!?」

アクアビツト

「メスカルがシェリーを気に入るワケだわ・・・」

コナン

「しゃべるな!」

哀

「そのキズを直したら、カシャツサの所に案内してもらってから覚悟  
しなさい!」

すると、ヘリコプターのライトがコナン達を照らした。

バラバラバラバラ・・・

ガウン!!

飛んで来る弾丸に対し、アクアビットは咄嗟にコナンと哀の頭を下  
げる。

チュン!

続いて飛んで来た2発目が、アクアビットの心臓を貫く。

ガウン!!

ドッ!!

アクアビット

「あぁっ!」

コナン・哀

「アクアビット!」

アクアビット

「工藤新一……シエリー……いつまでも……追いつけるが良  
いわ……」

その言葉を最期に、アクアビットは絶命した。

次回はアクアビットの回想です。

## 第8章・3：アクアビットの悲しき過去

アクアビット

「（アタシ、死ぬのね・・・これでやっと、あの人の元に行ける・・・）」

回想

アクアビットが組織に入ったのは、3年ほど前の事だった。

メスカルに弟子入りしたのだ。

アクアビット

「アクアビットです。メスカルさん、よろしくお願いします・・・」

メスカル

「そんなに構えなくて良いわよ。アタシにはタメ口で構わないから・・・あ、そうだ。アタシの弟を紹介するわね。」

ナポレオン

「オレはナポレオンだ。よろしく。」

アクアビット

「よろしく・・・」

ナポレオンの第1印象は、マジメで優しい好青年だった。

アクアビットは彼の優しさに少しずつ惹かれていった。

そして1ヶ月後・・・

アクアビット

「それは本当ですか、ナポレオンさん？」

ナポレオン

「ああ・・・オレとつき合ってほしい。後、オレの事は呼び捨てで呼べ・・・」

アクアビット

「不束者ですが、よろしくお願いします・・・ナポレオン！」

こうして、ナポレオンとアクアビットは恋人同士になった。

幾度かデートも重ね、徐々に仲を深めていった2人。

そして、結婚寸前までいていたのだが・・・

アクアビット

「え・・・ナポレオンが・・・死んだ!？」

メスカルの突然の知らせに、アクアビットはお気に入りだったカッ

プを落として割ってしまった。

メスカル

「ええ……仕事で失敗して、警察に捕まるのを恐れた仲間の手でね……」

アクアビット

「ソイツ……誰？」

メスカル

「え？」

アクアビット

「誰なのよ！！ナポレオンを殺したヤツは！？」

メスカル

「カシャツサよ……ジンのイトコで、彼以上に冷酷な性格をした男……」

アクアビット

「アタシ、ちょっと出て来る……」

メスカル

「ちょっと、どこ行く気！？」

アクアビット

「カシャツサってヤツの所よ！！ソイツの居場所突き止めて、ナポレオンの仇を討つの……」

メスカル

「止めなさい！！あなたがかなう相手じゃないわ！！」

アクアビット

「メスカルは悔しくないの！？自分の弟が殺されたのよ！！」

メスカル

「アタシだって悔しいわよ・・・でも、あなたまで失いたくないの・・・あなたはアタシにとって、妹みたいなものなんだから・・・」

アクアビット

「メスカル・・・」

アクアビットはメスカルにすがりつき、泣いた。

その後カシャツサはジンやシェリーを始めとするメンバー立ち会いの元審判にかけられ、上流幹部から格下げされた。

アクアビットはトレードマークだったショートヘアを腰まで伸ばしロングに変え、いつかカシャツサを討つために力をつけたのだ。

そしてカシャツサが動き出した時、メスカルと共にメンバーに入っただのである・・・

## 第8章・4：コナンと哀の逃避行

アクアビット

「工藤新一……シエリー……いつまでも……追いつけるが良いわ……」

ガクツ……

コナン・哀

「アクアビット……」

マール

「チイツ……アクアビットを盾にしゃがった……」

カシャツサ

「下に降りられると厄介だ……あれを使え……」

スピリタス

「了解……」

バラバラバラバラ……

コナン・哀

「クソツ……」

カチツ……

スピリタスがスイッチを押すと、強力なライフルから弾が発射され始めた。

ドドドドドド!!

ガガガガガガガガガ!!

コナン・哀

「わっ!!」

ガガガガガガガガガ!!

下のガラスが次々に割られる。

イリュウは倒れたイズナとミカゲをかばっていた。

コナンと哀は、上に上がるために階段に向かう。

ダッ!

カンカンカン・・・

カシャツサ

「出たぞ! 続ける!!」

ガガガガガガガガガ!!

ヘリコプターは旋回しながら、コナンと哀を追い詰めていく。

ガガガガガガガガガ!!

バンッ!

コナンと哀は展望台に飛び込み、壁のような場所に隠れた。

ドサッ！

コナン・哀

「ハアハア・・・」

ガガガガガガガガガ！

コナン・哀

「！！！」

ヘリコプターは展望台のガラスを次々に破壊していく。

ガガガガガガガガガ！！

割れたガラスの破片が、コナンと哀の肩をかすった。

ビッ！

コナン・哀

「うっ！！」

バラバラバラバラ・・・

スピリタス

「カシャツサ・・・どうします？」

カシャツサ

「マール、いぶり出せ！」

マール

「オツケー!!!」

コナン

「クソツ……」

哀

「どうしよ、新一君……」

マールは展望台に催涙弾を撃ち込んで来た。

シュツ!

カラン……

バシユウ!!

コナン・哀

「催涙弾!?ゴホツゴホツ……」

コナンと哀はたまたまず、展望台の外に飛び出した。

カシャツサ

「出て来たぞ……このまま上まで追い詰める!!!」

ガガガガガガガガ!!

コナンと哀は、ゆっくりと上まで追い詰められていく。

ガガガガガガガガガ！！

そして、ついに屋上に追い詰められた。

カシャツサ

「フン・・・ネズミ共は追い詰めた・・・上だ・・・上から狙え！  
！それで死角はなくなる！！」

スピリタス

「了解！！」

バラバラバラバラ・・・

ヘリコプターは、上へと飛んで行く。

真上からコナンと哀を狙う気だ。

コナン

「クソッ！」

哀

「どうしよう新一君・・・このままじゃ袋のネズミだわ・・・」

コナン

「・・・」

コナンは服を探る。

すると、ワイヤーグリップが出て来た。

コナン

「哀、さっきイズナから何か取ってたよな？」

哀

「うん、シャボンガトリンガーの：RINGを・・・」

コナン

「使えるぞ、それ！」

哀

「え？」

バラバラバラバラ・・・

カシャツサ

「さあ、ツラを拝ませてもらっぞ・・・」

コナンは片手で哀を抱えると、ワイヤーグリップを使って飛び降りた。

コナン

「ハアッ！」

バツ！！

果たして、コナンと哀の命運は・・・！？

第8章・5：コナンと哀の反撃！！

コナン

「ハアッ！！」

バツ！！

ゴオオオオオ・・・

スピリタス

「と、飛び降りやがった！！」

カシヤツサ

「フン・・・逃げ切れねえと観念したか・・・」

ゴオオオオオ・・・

哀

「シャボンガトリンガー、メタルスペシャル・・・弾は小さく、そして速めに・・・」

タワーの台の部分に着く寸前に、哀は銃を上に向ける。

哀

「いつけえっ！！」

哀は弾丸を撃ち出した。

ドン！！

ゴオオオオオ・・・

バラバラバラバラ・・・

飛んで行った弾丸は、ヘリコプターを撃ち抜く。

ガンツ！！

ドオン！！

ミード

「や、やられた・・・」

マール

「ちよつと、どうなってんだい!？」

スピリタス

「せ、制御できません!!」

カシャツサ

「やむを得ん・・・引き上げろ!!」

スピリタス

「了解!!」

カシャツサ

「（何だ・・・）」

バラバラバラバラ・・・

カシャツサ

「（何者なんだ・・・!!!?）」

バラバラバラバラ・・・

ヘリコプターは途中で爆発し、地面に墜落していった。

ドオン！！

ヒュルルル・・・

ドオン！！

コナン・哀

「ハアハア・・・」

メスカル

「さすがシルバーブレットとその彼女・・・やるじゃない・・・」

バババババ・・・

アテネ

「面目ありませんわ・・・」

ジエイムズ

「みんな無事で良かったよ。」

由衣

「ねえ勘ちゃん、今度遊園地に遊びに行かない？」

勘助

「たまには息抜きも良いかもな・・・山村、如月！せっかくだからオマエ達も来い！」

ミサオ

「じゃあ・・・」

羽鳥

「お言葉に甘えようかな・・・」

風月

「あゝあ！今回は私達良いトコなしね・・・」

暁

「仕方ないだろ、洗脳されてたんだから・・・」

哀

「コナン君、やっぱりあなたはスゴいわ！あんな絶体絶命の状況を打破するなんて・・・」

コナン

「哀がイズナからあの：RINGを取ってたおかげだよ・・・」

哀

「コナン君・・・」

コナン

「ん？」

哀

「大好き」

哀はコナンに抱きつき、熱いキスをした。

少年探偵団の面々や他の人達もその場にいたため、コナンと哀は終始冷やかされるハメになるのだが・・・

## エピローグ：コナンと哀の決意

コナン・哀・阿笠・ユリの4人は、白野琴葉と瀬藤愛子が監禁されていた場所を訪れていた。

阿笠

「墜落したヘリコプターからは、誰の遺体も発見されなかったようじゃな……」

コナン

「ああ……」

哀

「爆発する前に、全員脱出したんでしょ……」

ユリ

「……結局、アクアビットの正体はわからないまま……警察は、何1つ手掛かりをつかんでないんでしょ……」

コナン

「オレ達が話すワケにもいかねえしな……」

阿笠

「それにしても、こんな所に10日間も監禁されておったとはのお……」

コナン

「白野本部長達も、自分達を拉致した犯人の顔は見えないらしい……」

ユリ

「とにかく、彼女達を救出できたのは元太君のお手柄ね・・・」

コナン

「ああ・・・アクアビットは監禁場所を吐く前に死んじまったし・・・」

哀

「ミカゲさんは、拉致には直接関わってないから場所すら知らされていないかったようだしね・・・」

ユリ

「・・・」

コナン・哀

「（アクアビット・・・）」

アクアビット『工藤新一・・・シェリー・・・いつまでも・・・追いつけるが良いわ・・・』

コナン

「（追いつけてやるさ・・・）」

哀

「（あなた達を、完全にぶっ潰すまではね!!）」

## エピソード：コナンと哀の決意（後書き）

『名探偵コナン・忘却の狂戦者』バーサーカー

主題歌・PUZZLE

メインテーマ・名探偵コナン・メインテーマ（漆黑バージョン）  
サウンド・名探偵コナン『漆黒の追跡者』チェイサー オリジナル・サウンドト  
ラック

予告のページ

名探偵コナンスペシャル・第15弾・・・

キーワードは、

7つの宝石・・・

強盗団・・・

そして、3人の怪盗!!!

名探偵コナン・幻惑の3怪盗!!!トライシーフ

近日連載開始!!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3917h/>

---

名探偵コナン・忘却の狂戦者(バーサーカー)

2010年10月10日13時41分発行